

青森ねぶたの現代の変容

阿南透

Modern Changes in Aomori Nebuta Festival

はじめに

- ① 本体の変化
- ② 組織の変化
- ③ 運行形態の変化
- ④ 時期別の特徴
おわりに

【論文要旨】

本論文は、青森市で毎年八月二日から七日まで開催される「青森ねぶた祭」を取り上げ、それが現在のような大規模な都市祭礼になっていった過程を考察する。

現在の青森ねぶた祭は、巨大な人形型の燈籠、囃子、ハネトと呼ばれる踊子、この三つのセットで構成された集団が合同で運行する行事である。国の重要無形民俗文化財に指定されているものの、特定社寺と結びついた宗教行事ではなく、起源や由来も定かではない。ねぶたに類する行事は青森県内をはじめ東日本各地に見られ、青森市のねぶたも戦前まではそうした各地の行事と大差ないものであった。現在のような様式が成立したのは戦後のことと考えられる。本論文は、その成立過程とその後の変容を、ねぶた本体（燈籠）、祭りの組織、運行形態の三点から明らかにする。

まずねぶた本体は、道路幅や歩道橋の高さといった、青森市街地の形状により大きさの上限が決まり、ねぶた師と呼ばれる制作者の創意工夫で一九七二年頃に現在の様

式が確立した。次に祭りの組織については、経費の高額化に伴い、ねぶたを運行する団体が地域から行政・企業へ移行し、主催者と対等の発言権を有するに至った。そして運行形態については、有料観覧席の設置など観光客対策、国道の使用時間制限、さらには急増するハネトとその逸脱行為が、運行コースや運行台数を規定した。

このような戦後の変化は五つの時期に区分できる。すなわち、一九四七年の本格復活から六一年までの第一期は、戦争による中断からの復興の時期である。一九六二年から六七年までの第二期は、観光化の開始と大型化の時期である。そして一九六八年から七九年の第三期に、青森ねぶた祭が確立し、一つのピークを迎える。一九八〇年から九六年の第四期は、若者の逸脱行為が目立ち始める転換期である。そして一九九六年の暴力事件をきっかけとして、一九九七年からの第五期は、逸脱行為への対応に迫られる変容期に入り、現在も試行錯誤が続いているのである。

はじめに

(1) 問題の所在

本稿は、青森県青森市で毎年八月二日から七日まで開催される「青森ねぶた祭」を取り上げ、それが現在のような大規模で特異な都市祭礼になっていった過程を考察する。

青森ねぶた祭は、日本を代表する夏祭りの一つとして知られている。このため古くからの伝統に裏打ちされた行事のようにも見えるが、特定社寺と結びついた宗教行事ではなく、起源や由来も定かではない。また、一九八〇年に国の重要無形民俗文化財に指定され、ねぶた本体（大きな燈籠）の優れた芸術性が人々の目を驚かすものの、実はねぶた本体は毎年新しく作られ、祭りが終わると棄てられる、一年限りの作品である。しかも、電球、蛍光灯、バッテリー、発電機、トラックのタイヤ・車軸など、新しい技術を積極的に導入し、新たなテーマをねぶた本体の題材として発掘するなど、創意工夫を凝らす一面がある。

また、早くから有料観覧席を設置したり、他の祭りとして「東北三大祭」というセットを作ってツアー客を呼び込んだり、全国そして世界各地に積極的に遠征するなど、観光面の取り組みも盛んな行事である。またねぶたを出すための費用が高額化したため、出す団体は企業が大半であり、企業の多額の出資なしには祭りが成り立たなくなっている。こうした点は、ある程度までは現代日本の多くの都市祭礼に共通する傾向であり、それを青森ねぶた祭は先取りしてきたと考えられる。

従って、青森ねぶた祭は、日本の都市祭礼の持つ現代的特徴を先取りした典型例として研究されるべきであるが、ここではその前提として、今日見るような行事のスタイルの成立と展開の過程を、あくまで祭礼自体の変化をたどる中から明らかにしていきたい。

(2) 先行研究

これまでのねぶたの研究には、まずねぶたの起源を探るさまざまな試みがある。古くは近世から、郷土史家らによりさまざまな説が唱えられているが、数年前までの観光パンフレットには、後述の「民俗学説」と並んで、坂上田村麿起源説と、津軽藩主・津軽為信起源説が記載され、良く知られている。^①

一方、民俗学においては、ねぶたを「眠り流し」「ねむ流し」「ねぶ流し」などと称される一連の行事の一つとして分析した柳田国男の研究が著名である。柳田は、七夕に水浴びをしたり川に何かを流すこれらの行事が、青森県津軽地方から富山県あたりまでの日本海側、さらには信州や関東にも見られることを述べる。そしてその比較から、「津軽その他の佝僂太が聖霊送りの燈籠と通例これに伴う犠牲の人形との合体したものであるらしい」と起源を推測する（柳田一九九〇a、四五七）。名称については「ネプタを睡魔と考えたことは、秋田地方でこれを眠流しというのでもわかる」（柳田一九九〇a、四五八）とする。そして青森の場合、これが燈籠の風流、すなわち飾り物に発展したとする（柳田一九九〇b、一一三―四）。藤田本太郎も基本的にこの見解を継承している。藤田は、眠り流し、すなわち「暑さのきびしい、しかも農作業のはげしい夏季におそってくる睡魔という目に見えない魔者を追い払うための行事」（藤田一九七六、一九）が燈籠祭に発達して、いま見るようなねぶた祭りになったとしている。そしてこれが青森では、ねぶたの起源の「民俗学説」として知られている。

柳田は、ねぶたが村落行事に基盤を置いていることを重視する。それは「町と村落と、一つの行事の花々しさの度のちがう理由は、誰にでも容易に推測し得ることである。かりにこの習俗が起こりの遠いものならば、湊や城下町で始まった気遣いはなく、すなわち今ある形は後々の発達でなくてはならぬのだが、妙にこの点だけはお国自慢の人が取り違え

ている。古いと言いながら今の姿によって、その由来を説明したがる者がまだ多いのである。」〔柳田 一九九〇b、一一一〕という記述によく現れている。

これに対し、町で発展した風流の部分強調し、農村祭礼とは異なる都市祭礼としてのねぶたを重視する見方もある。

池上良正は、ねぶたには農村行事としての側面とは別に、町部、とりわけ城下を中心に発達した風流的祭礼の側面があることを強調する。具體的には、青森県下ではすでに幕末から明治初年に、弘前、黒石、青森、鯨ヶ沢、木造、金木、五所川原、板屋野木（現、板柳町）、藤崎、小湊（現、平内町）などの町部でねぶたが行われており、これらは能代・鶴岡の眠流し、秋田・角館の竿燈、湯沢・村上・高岡の七夕祭など、日本海側に広く分布する風流化された七夕行事に連なるものという〔池上 一九八六〕。そして、近代のねぶたの二つの側面の関係について、「第一は、農村を基盤とした民俗行事『ネブタ流し』としての側面であり、第二は町部で風流化した祭礼『ネブタ祭り』としての側面である。歴史的にみれば、第一の民俗行事を基礎に近世期において第二の町部の祭礼が発達し、近世末より近代に入るころから、逆にこうした町部の祭礼の持つ風流的要素が農村行事の模範となり、大きな影響を与えていった」〔池上 一九八六、六六〕と両者の関係を推測する。^②

小松和彦は、ねぶたの源流を農村などで行われていた民俗行事に求める「村落行事源流説」に対し、源流を都市の祭りに求める「都市祭礼源流説」の重要性を指摘する。すなわち、都市の祭りは村の祭りの仕組みでは説明仕切れないものであり、たとえ弘前や青森の七夕祭が村落の七夕祭をまねたものであったとしても、都市の祭りとしての七夕祭へ発展するためには大きな飛躍、性格の変化があったとする。具体的には、「七夕祭」や「眠気流し」といった性格を捨て去り、燈籠をいかに観客を喜ばせるように見せるかという「見世物性」を強く意識したものになっ

ていく。そして京都の祇園祭などとの比較から、祭礼の余興的部分である「練り物」を集団ごとに工夫し競い合う点を都市祭礼の特徴として指摘し、こうした風流が全国各地の都市祭礼に取り入れられたとする（小松 二〇〇〇a）。そして青森ねぶたを考える際にも、京都や西回り航路の寄港地との文化交流を重視すべきことを指摘する（小松 二〇〇〇b）。同様に中牧弘允も、日本海沿岸の風流灯籠の地方的発展としてねぶたを捉えている（中牧 一九七九）。

これらの指摘があるものの、都市部のねぶたについての学術研究は、ようやく端緒についたばかりの観があり、各地の事例報告が開始めところである。このうちでは弘前市が最も早く（藤田 一九七六）や〔弘前大学人文学部人間行動コース 一九八六〕などがある）、その後、むつ市大湊（大湊ネブタ百周年記念事業実行委員会 一九八五）、黒石市〔笹森建英編 一九九五〕、それに秋田県能代市の眠流し〔能代のねぶながし行事記録作成委員会 一九九八〕についても、主催者もしくはそれに近い立場による報告書が相次いだ。そして青森市についてもようやく調査報告書が出た〔宮田・小松 二〇〇〇〕^③。これらの報告では、近世・近代の史料の不足から成立期の事情については必ずしも十分判明したとはいえないものの、各地のねぶたの変遷と、都市ごとの個性的な形態の成立事情が徐々に明らかになりつつある。

（３）青森ねぶたの特徴

現在、青森ねぶた祭の日程は、八月一日に前夜祭があり、二日から六日の夜に市内中心部で合同運行が行われる。そして七日は昼の合同運行があり、夜の海上運行ですべての行事が終了する。合同運行には、現在では二四台の大型ねぶたと（近年の例として、一九九九年のねぶたを表１に示す）、一〇～一五台の子供ねぶた・地域ねぶた^④が登場する。「東北三大祭」の一つとされていることもあり、六日間の出は三八〇万人を

超す、全国有数の大規模な祭りである。

この行事が、青森県津軽地方を中心に分布する他のねぶた^⑤と異なる点をまとめてみよう。

まず第一に、青森市のねぶたは、巨大な燈籠であるねぶた本体に加え、囃子、それにハネトと呼ばれる踊り子、この三つの要素から構成されている。特に大人数のハネトの存在は、他の都市にはない特徴である。

第二に、現在の青森市のねぶた本体は、針金の枠組に紙を貼った人形燈籠を、中から電球で照らしたもので、歌舞伎の名場面や、日本や中国の歴史・伝説などから題材を取り、人形一つないし二つ（まれに三つ以上）から構成される。大きさは、大型ねぶたの場合、高さ五メートル（台車を含む）、幅九メートル、奥行き七メートルという、横長の平べったい空間に収めなければならない。幅に比べて高さが低いため、重心の低い、這いつくばったような姿勢が特徴である。

ちなみに県内主要都市を見ると、弘前市では青森市のような人形の形をした「組ねぶた」は少数派であり、扇形の行灯に武者絵などを描いた「扇ねぶた」が主流である。また黒石市は、形態は弘前風の扇ねぶた、青森風の人形ねぶたの双方あるがやや小ぶりで、人形ねぶたは三段（五段の高欄の上に載せるのが特徴である。そして七〇台を超えるという台数の多さを誇りにしている「あおり草子編集部 二〇〇〇」）。五所川原市では、一九九六年までは小型の組ねぶたが一〇台ほど出るだけであったが（しかもその多くは木造町で使用したものを購入していた）、一九九七年に制作された高さ二メートルの「立佞武多」が瞬く間に行事の中心となり、二〇〇〇年には大型三台のほかに中型も三台登場し、他都市にはない「立佞武多」が特徴になった。

第三に、青森市のねぶた本体を載せている台車はりヤカーが発展し大型化したものである。トラックのタイヤを用い、車輪は二輪で、引き綱を用いずに引き手と呼ばれる前後にある棒を押して動かす。このため、

急停止や旋回、上下動など、機敏な動きが可能である。これは他のねぶたや、全国各地の山車・曳山・屋台にない特徴である。

第四に、青森市のねぶたを出す団体（運行団体^⑥）は、大型ねぶたについては、町内会などの地縁組織が減少し、企業や公共団体が多くなっている。これは経費の高額化に伴い、地縁組織には運行費用をまかないきれなくなったことに原因がある。そして大型ねぶたの運行団体は「ねぶた師」と呼ばれる外部の専門家にねぶた制作を発注している。

第五に、青森市では、大型ねぶた制作者としての「ねぶた師」という専門家の地位が確立している。現在、青森市では二四台の大型ねぶたのうち一台は市民有志による自主制作であるが、他の二三台を一四人のねぶた師が制作している（子供ねぶたや地域ねぶたは、市民による自主制作が主流である）。ねぶた師は、運行団体から大型ねぶた制作を受注し、費用の支払いを受けてねぶたを制作する。ねぶた師はそれぞれ、数名から十名弱のスタッフ（弟子や電気の専門家）を抱え、紙貼りに主婦をアルバイトで雇うなど、一種の制作集団を率いている。各団体の制作者名は毎年の新聞やパンフレットに掲載され、市民には周知のものである。しかし制作者としての地位は、ねぶた制作だけで全員が生活できるほどには高くなく、本業を別に持っている者が大部分である。それでも、以前は単なる「物好きの道楽」としか見なされなかったことを考えると、青森市ではねぶた制作者の地位が「職人」から「芸術家」へと徐々に向上しつつある^⑦。そしてこれまでに四人が、青森市から「ねぶた名人」の称号を授与されている^⑧。なお、大型ねぶたを作るねぶた師になるためには、ねぶた師に弟子入りして修業し、少しずつ作業を任せながら、大型ねぶたの制作、そして独立のチャンス等待つという、一種の徒弟制度がいまだ健在である。このように、大型ねぶた制作に関して外部からの安易な新規参入を阻む仕組みが存在するのは、運行団体の側が、一定水準の大型ねぶたを一定期間内に制作するための能力保証を徒弟制度に見

表 1 1999 年大型ねぶた一覧

団体名	ねぶた題名	制作者
に組・東芝	雷神	白鳥芳生
青森大学	雷神菅原道真	北村隆
サンロード青森	縄文鼓動「祈」	千葉作龍
青森市役所ねぶた実行委員会	風雲児信長	亀元鴻生
消防第二分団・アサヒビール	三国志「孔明・風を呼ぶ」	千葉作龍
県庁ねぶた実行委員会	雪の奮戦 佐藤忠信	川村心生
日本通運(株)青森支店ねぶた実行委員会	弁慶と知盛	福井祥司
青森マルハ佐武多会	魚跳龍門	竹浪魁龍
青森市PTA連合会	剣聖武蔵 梅軒を討つ	柳谷優浩
(社)青森青年会議所	風神 雷神	内山龍星
青森自衛隊ねぶた	奇襲 桶狭間	木村登美男
日立連合ねぶた委員会	武神「関羽」	渋谷一擲
ねぶた愛好会	連獅子	石谷進
ヤマト運輸ねぶた実行委員会	三国志 赤兎馬関羽武勇	亀元鴻生
東北電力ねぶた愛好会	宇治川の先陣争い (佐々木高綱)	亀元和生
JRねぶた実行委員会	縄文 三内丸山	北村隆
青森菱友会	梵珠山の由来より 文殊	竹浪魁龍
私たちのねぶた自主製作実行委員会	善知鳥安方忠義傳	私たち一同
青森県板金工業組合	源頼光 酒天童子を討つ	内山龍星
ふれあい郵便局ねぶた実行委員会	奮戦 津軽為信	内山龍星
NTTグループねぶた	瓶割り柴田	福井祥司
日産青森会ねぶた実行委員会	水滸伝地獄廻り	北村明
(株)ダックビブレ青森ビブレ	天孫降臨	北村隆
青森ナショナルねぶた会	降魔調伏「安倍晴明」	千葉作龍

いだししているためである。なお、周辺他都市では、青森のように制作者の名がはっきり知られているのは、弘前や黒石の一部のねぶたに限られるようである。

第六に、莫大な数の観光客がやってくるのも青森市ならではの特徴である。青森ねぶたは、一九六二年頃に仙台七夕、秋田竿燈とともに「東北三大祭」と名乗り、観光客の誘致に力を入れ始めた。その後もさまざまな経緯があり、近年では六日間の期間でコンスタントに三五〇万人以

上を集めている。これは近隣諸都市のねぶたとは大きく異なる特徴である。

以上、六点ほど青森市のねぶたの特徴を列挙したが、これらはいずれも戦後の青森ねぶたにのみ見られる特徴である。

本稿では、青森ねぶたがその独自の形態をどのように形成し、現在見るような形になっていったかを明らかにする。そのため本稿では、ねぶた本体、祭りの組織、運行形態、この三点に注目し、戦後の変化をたど

りながら、現在の様な様式が確立した経過を示していきたい。

① 本体の変化

(1) 戦前までの青森ねぶた

本章では、ねぶた本体の形態について、どのようにして青森独自の形が成立し、現在見るような姿に発展してきたかを述べる。

最初に、青森ねぶたの発生に関する記録を見ておこう。近世のねぶたに関する記録は弘前のものが多く、文献に青森市のねぶたが登場するのは江戸末期からのことである。最も古い史料は、「柿崎日記」天保十三年（一八四二）の次の記事だという。「七月、倭武多無し：当年七夕祭は子供ばかりにて、町内よりはねぶた一切不出」（清野二〇〇〇）。その後、柿崎日記には津軽藩からのねぶた禁止令がたびたび出されたことが記されている。江戸末期の青森ねぶたについては、運行の詳しい様子やねぶたの形態の記録がない。しかし清野耕司は、「毎年七月七日（旧暦）の数日前から各町内の壮年者が頭取（代表）となって、ねぶたを作り、六日の夜まで毎夜（何日間くらいか不明）町内や場合によっては他町まで持って出て歩いた。この時に金銭を集めることもあり、運行に際しては喧嘩口論もあったようである。六日は最後の夜、七日昼は堤川でのねぶた流しということで、合同の運行に近かったかもしれないが、五日までは各町内毎の自由運行だったようだ」と当時の様子を推測している（清野二〇〇〇、七〇）。

近代に入り、一八六九（明治二）年の「村林舊記」には、当時の大型ねぶたについて初めて具体的な記述が登場する。

「七夕祭ねぶた多分に出る、近来珍しき程大なる物夥多なり

一 濱町（宝船 神功皇后）

- 一新町（牛若 鼻天狗高十一間）
 - 一大工町（輿）鍛冶町（姐已）
 - 一米町（漢皇祖白蛇を斬る）
 - 一 安方町（相馬将門 千両箱）
- 右何れも百人余の担ぎ也

四五十人持は大町、蜆貝町、博労町、塩町なり。右の他各町にて小き一人持以上のもの沢山なり」（清野二〇〇〇、七四）

この記述が事実だとすると、百人で担ぐ巨大なねぶたや、高さ十一間というから約二〇メートルの高いねぶたがあったことになる。一方で一人で持つ小型ねぶたも多数あったという。

しかし、一八七三（明治六）年に青森県権令に着任した、元大垣藩士の菱田重禧がねぶた禁止の布達を出す。その効力は定かでないが、ねぶたは蜜習として禁じられたのであった。しかし一八八二（明治十五）年には「倭武多取締規則」が定められ、条件つきで禁止が解除になった。そこでの条件の一つにねぶたの大きさ制限があり、「高サ一丈八尺以上、幅一丈三尺以上ノモノハ之ヲ許サズ」と定められた。つまり高さ約五・五メートル、縦横の幅四メートルが上限となった（清野二〇〇〇、七七）。以前に比べて小型化したものの、ここからねぶたが公認される。しかし、一八九八（明治三十一）年に新しい「倭武多取締規則」が発令され、大きさに関しては、ねぶたの高さを土台から八尺（約二・四メートル）以下、四人以下で担ぐものと制限した（藤田一九七六、八六）。これによって、青森ねぶたは四人で担ぐものが主流になる。また、一八七九年に青森電信分局、一八九七年に青森電灯会社が設立され（清野二〇〇〇、八〇）、電線がねぶたの大型化を阻む障害物として登場したのであった。

大正期には、力自慢の若者が一人で担ぐ、一人担ぎのねぶたが考案された（清野二〇〇〇、八二）。また大正期には、七月六日の夜と七日の昼に合同運行も行われた。合同運行の起源は不詳であるが、この二日間の

合同運行について、郷土史家の肴倉弥八は、明治末の武田千代三郎知事の在任中には既に行われていたと述べている（「青森観光協会 一九七七」）。

一九二八年に青森と弘前のねぶたを見た今純三が記したところによると、ねぶたの大きさは、「比較的中のないものならば一人かつぎとするのであるが、それには把柄として垂直に丈夫な棒が取りつけられ、更にそれに肩あてと手がかりのために程よい位置に横木がつけられてある。又巾のある大きなネブタになると、丸太を以て脚を組みそれに堅横に丸太を結び付けて『十六人かつぎ』『三十二人かつぎ』とする。尚一つの方法は、山車に使ふ四輪車に乗せて綱曳きとするか、又は普通の手車を取りつけて曳くかである」〔現今では経済と電線に余儀なくされて、高さ十五尺と限られて居る〕（今 一九二八、四八―四九）とあることから、当時は必ずしも「倭武多取締規則」を厳格に守っていたわけではないようだが、それにしても現在と比べると小さいことがわかる。

このように、戦前のねぶたは小さなものとどまり、現在の青森ねぶたに見られるような特徴はまだ現れていなかった。

やがて、一九三七年の日華事変勃発により戦火が拡大すると、この年からねぶたは中止となった。一九四四年には例外的に一度だけ実施したが、物資不足からごくわずかな台数しか出なかった。ねぶたが復活するのは、一〇年後の一九四六年のことである。

（２）青森ねぶたの定型化

青森ねぶたは、戦後一九四六年に早くもいくつかの町内（確実な資料はないが、おそらく五町程度）で復活した。しかしまだ組織的な運行には至らず、町の人々による自主運行であった。青森ねぶたの本格復活は一九四七年で、青森市復興港まつりというイベントの一部であった。

戦後の混乱期には、ありあわせの材料で間に合わせ、とにかくねぶたを運行すること自体が目的になっていた。しかし青森の復興も進むうち、

より優れたねぶたを目指す傾向が顕著になる。ねぶたの出来映えを審査し、表彰する制度も始まる⁹⁾。

戦後の青森ねぶたで重要なのは、戦前にあったねぶたの大きさ制限が撤廃されたことである。すなわち戦前のねぶたの大きさを規定してきた一八九八（明治三十一）年の「倭武多取締規則」がなくなり、制度上はそれまででない大きさのものを作ることが可能になった。

とはいっても、無制限に大きいものを作るわけではない。材料の制約と道路状況が大きさを規定していくことになる。特に道路状況による制約は大きく、ある意味で青森特有のねぶたの形を決めたのは青森の都市空間であるといつて過言ではない。

青森市は、一九四五年七月の空襲で市の中心部が焼失した。復興時に青森県土木課は、道路幅を広く取った都市計画を作成した。柳町通りの五〇メートルをはじめとして、国道四号・七号が三六メートル、八甲通り、柳町通りなどの目抜き通りが二五メートル等、目抜き通りの幅は戦前の二倍ほどに広がり（対馬 一九五二）、車道だけの幅でも、国道四号・七号が二四メートル、他の目抜き通りが一―一二メートルという、碁盤目状に直交した整然とした町並みが作られた。こうしたことから、青森ねぶたの形状はまず横幅が広がっていく。その到達点が一九五七年で、当時流行していたワイドスクリーン映画の「シネマスコープ」の名を取って「シネスコ型」と呼ばれたほどの幅があった。すなわち「参加一二組のうち第二消防団の『小野川喜三郎猫退治』は戦後最大といわれる幅二八尺の大作であり、魚市場青年会の『坂上田村磨鬼退治』と東北電力の『勸進帳』、青森電通の『宇治川先陣争い』はいずれも二七尺、古川魚菜市場の『勸進帳』と浦町消防団の『熊谷直実と平敦盛』も二六尺で、大町通りはもちろんコースの青森駅横通りも通れない。このため以上六組は合同運行途中、青森駅前から東洋劇場まで引き返し直接国道へ抜けて合流する」（『東奥日報』一九五七・八・六）。このように、最大で二八

尺(約八・五メートル)もの幅があつては、当時の合同運行コースの一部を通行できず、迂回を余儀なくされる事態が発生したのであつた。このあたりで横幅の広がりがほぼ限界に達し、最終的には九メートルが上限として定められる。そして運行コースも、九メートル幅のねぶたが車道を通して目抜き通りに限定される。

次に高さであるが、一九五五年頃に青森随一の繁華街である新町通に作られた、道路をまたぐ広告アーチの下辺が高さ五・四メートルであり、新町通を運行するためには、それ以上の高さのねぶたを作れなくなつてしまつた。さらに一九六九年には県庁前に高さ五・二メートルの歩道橋ができ、高さ制限がさらに厳しくなつた。こうして高さ五メートルがねぶたの上限になるのである。

さて、戦後はねぶたを作る材料にも大きな変化があつた。その最大のものは、骨組みを竹ではなく針金で組むようになったことである。最初のはひもの結び目など、細かな部分にだけ針金がいれた。やがて竹を全く使わず、針金だけで骨組みを作るようになる。針金の導入により、体をひねる姿勢や、衣装の細かな造作が制作できるようになった。また、以前は墨で描いて済ましていた歯、舌、眉などの体の細部を立体的に作つたり、指を一本ずつ離して作る、体の筋肉を表現するといった、彫刻のような表現が可能になつていった。造型として、よりダイナミックな表現ができるようになったのである。

こうして、一九五五年から五七年頃に、戦後の青森ねぶたの大きさと独特の形が定まり、以後の発展の基礎が築かれたと考えられる。

こうした時期に活躍したねぶた師の代表が、北川金三郎(一八八〇～一九六〇)、北川啓三(一九〇五～一九八八)の親子である。北川金三郎の代表作は、一九五七年に東北電力から出した「勸進帳」であろう。現在とほぼ同じ幅にまでねぶたが大きくなったのはちょうどこの年であつたが、大きいだけでなく、造形としても大変優れた作品であつた。また、

ねぶたに初めて蛍光灯を使用した作品といわれ、その明るさも大評判になった。このほか一九五五年に東北電力から出した「九紋龍と花和尚」も評価の高い作品であつた。これらが当時を代表する作品といえよう。

北川金三郎は一方で、針金の線を生かして女性を造型した優美なねぶたにも挑戦した。一九五四年に三陸炭坑から出した「羽衣」、一九五六年に東北電力のねぶたに付属した前ねぶたとして出した「藤娘」などがそうである。しかしこうした優美なねぶたはねぶたの主流とはならず、その後もさまざまなねぶた師が実験的に取り組んではきたものの、単発的な試みに留まつている。

北川金三郎は、代表作の「勸進帳」を制作した三年後の一九六〇年に没する。後を引き継いだのは息子の北川啓三である。ちょうど一九六二年から審査制度が変わり、最も優れた一団体に贈る最高賞として「田村磨賞」が制定されたが、一九六二年は日本通運の「村上義光 吉野の関所」(写真1)、一九六三年は東北電力の「巖流島の決斗」と、北川啓三が制作した団体が二年連続で受賞し、第一人者の座を確立する。

なお、この「田村磨賞」の制定により、賞を目指す団体間の競争がいつそう激しくなり、このことがねぶたの制作技術のレベルアップにもつながつていくのである。

(3)「華麗」から「迫力」へ

青森ねぶたは、一九六〇年代後半から一九七〇年代前半に新たな展開を遂げる。この時期に、ねぶた師たちの創意工夫が新たな作風を生み、現代の青森ねぶたを作品の上で確立したのであつた。

その最初の転機となつたのが一九六七年であつた。この年は、前年に青森いすゞから「勸進帳」を出し、三度目の田村磨賞を受賞した北川啓三が、同じく青森いすゞから「菅原伝授手習鑑 車引の場」を出し、審査前の評判は高かつた。これも歌舞伎を題材にしたねぶたであるが、梅



写真1 北川啓三作「村上義光 吉野の関所」(1962)



写真2 川村勝四郎作「国引」(1967)

王・松王・桜丸の三体を並べ、華麗な色彩とバランスのとれた構成の秀作であった。ところが審査の結果、田村磨賞を受賞したのは川村勝四郎(一九二一〜一九八〇)が制作した、国鉄の「国引」(写真2)であった。これは日本神話に題材を取り、八束水臣津野命が岩を引いている場面を制作したのであるが、筋骨隆々とした半裸の男と、男を左に寄せ、右下の岩を睨んでいるという非対称の構図が特徴の、力感にあふれた作品であった。グロテスクなまでの迫力と、アンバランスな構図が評価されたのである。『青森民報』に掲載された選評には「田村磨賞の国引きは、従来見られなかった古事記の素材を取り上げ、旧来の型を破った新鮮味、特にプロポーションの優れている点が他を引き離れた好因となった」「ベテランの北川啓三は類型的になりすぎ『北川流』が鼻につき技巧におぼれすぎた嫌いがあった」(『青森民報』一九六七・八・七)とあり、「類型的」より「新鮮味」が高く評価されたことがわかる。

作品をもう少し細かく見てみよう。「国引」は半裸の男の力感を強調したねぶたであるが、裸体は着衣の体より難しいといわれる。まず構造的には、胴体から直角に突き出す腕の重さを支えるのが難しい。というのは、ねぶたの内部では木で組んだ骨組みが針金や電球の重さを支えている。胴体の骨組みを作るのは簡単であるが、直角に突き出した腕は、付け根の肩と脇で支えることになる。着物を着ていれば、少なくとも二の腕のあたりまでは太い袖があるため、腹から肘のあたりへ添え木をして腕の重さを支えることができる。ところが裸の場合は袖の太さがないので、添え木を入れるにくい。このため、動かしても落ちないように腕をしっかり固定する技術が必要なのである。また、裸体は、肌色を中心とした同系統の色の濃淡と、筋肉の形で表現せねばならず、色を自由に使える着衣に比べて、デッサン力や色彩の描写力など、絵の技術が必要とされる。こうしたことから、ねぶたで裸体が登場するのは、それまでには「九紋

龍と魯智深」などの特定の題材しかなく、しかもねぶたの歴史に残るような作品はほとんどなかったのである。

一九六七年の「国引」を制作した川村勝四郎は、この作品が生涯唯一の田村磨賞受賞であり、その後のねぶたと比べると稚拙さが目立つ作品であるが、ともかくこのねぶたが評価されたことにより、「華麗」から「迫力」へと、ねぶたの流れが変わったのであった¹⁵⁾。そして、その転換を如実に示すかのように、この年に田村磨賞を逃した北川啓三は、以後一度も田村磨賞を受賞することはなかった。

ねぶた本体の作風に関しては、この一九六七年が一つの転換点であった。この年以降、迫力のある裸体ねぶたが続々と登場し、しかも従来にはない構図の作品が続出するのである。田村磨賞受賞作を見ていくと、一九六九年からは鹿内一生(一九二五〜一九九一)が三年連続して受賞する。一九六九年の「三国

志（青年経営協議会）に続き、一九七〇年にはこれもねぶたの歴史に残る傑作「項羽の馬投げ」（青森市役所、写真3）が登場する。馬は鹿内一生が得意とする題材であったが、首などのわずかな部分だけで投げられた馬を表現した構図は斬新なものであった¹⁶。

続く一九七一年は、「金剛力士」（青森市役所、写真4）が田村磨賞を受賞し、鹿内一生が三年連続の受賞となった。これは半裸の金剛力士だけを単独で造型にしたねぶたである。それまでのねぶたは、終戦直後の物資に乏しい時期は別にして、二体ないし三体がならみ合う構図が主流となっていた。しかしこのねぶたは、金剛力士二体だけで作品として完結したねぶたであった。仏像をねぶたにしたこと自体まだ珍しいものであったが、それよりも、金剛力士の視線の先には何もなく宙を睨んでいるという、これまでのねぶたになかったまったく新しい構図が衝撃を与えた。ねぶた師の中には、これこそ鹿内の最高傑作と評する者も多い。



写真3 鹿内一生作「項羽の馬投げ」(1970)



写真4 鹿内一生作「金剛力士」(1971)

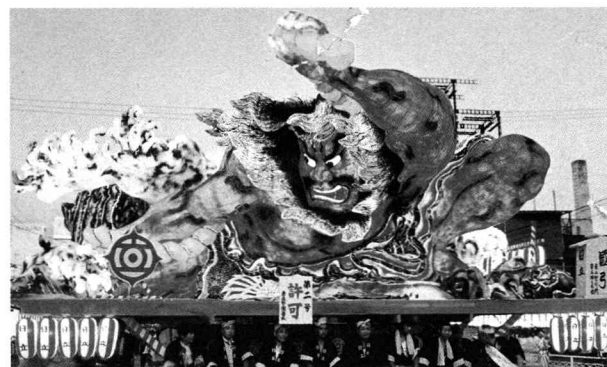


写真5 佐藤伝蔵作「国引」(1972)

さて、鹿内一生の田村磨賞四連覇がかかった一九七二年は、北川金三郎の弟子で、一九六八年に「草薙の剣」（東青信用組合）で田村磨賞を初受賞した気鋭の佐藤伝蔵（一九二五―一九八六）が、「国引」（日立連合、写真5）で二度目の受賞をした。これは今日に至るまでねぶたの最高傑作の一つとして語り継がれる作品であり、面は青森県立郷土館に保存されている。八束水臣津野命を単独で中央に大きく据え、二頭身とも三頭身とも言われるほど極端に顔を大きく作り、口を大きく開きザンバラ髪を逆立たせた造型は、これまでにない迫力を生み、この時期のねぶたの到達点となったのであった。この作品により、北川の作風を離れて新境地を開いた佐藤が鹿内のライバルとして注目され、両者のライバル意識がそれ以後のねぶたを高めていくことになる。そして郷土館に収蔵されたことにより、この作品が青森ねぶたの典型的な様式として、ねぶたの対外的なイメージを形作っていく。

その翌年、一九七三年もやはり裸体のねぶた「南祖坊と八之太郎」(青森青年会議所、千葉伸二¹⁷作)が田村磨賞を受賞する。しかし二年後の一九七五年には、同じく千葉伸二による「暫」(青森青年会議所、写真6)が受賞作となる。これは歌舞伎でおなじみの題材であるが、青森ねぶたでは、一九六九年に千葉伸二が取り上げた(電電公社)のが最初であった。一九七五年の「暫」は、一体で完結した作品であり、着衣だが口を大きく開けて迫力を出したねぶたである。「迫力」がねぶたに欠かせない要素として定着したことを示す作品であった。

(4) 造型芸術としてのねぶた

この時期には、もう一つの新たな潮流が登場する。それは仏像をねぶたにする試みである。ねぶたは特定宗教との直接の結びつきがない行事であるため、神仏をねぶたに造型することは、恵比須大黒や七福神を除



写真6 千葉伸二作「暫」(1975)



写真7 佐藤伝蔵作「風神雷神」(1974)

けばそれまではほぼ皆無であった。しかしこの時期の試みは、信仰対象として仏像を制作したというよりも、優れた彫刻としての仏像を模倣し、ねぶたで造型を試みたと見るべきであろう。

仏像ねぶたは、一九六九年に鹿内一生が「龍王と金剛力士」(に組)を制作したことに始まる。この作品については、「運慶の独特な作風は私の考えるねぶたに共通した点が見られるので運慶の作品の中から沙迦羅龍王と金剛力士像の二点をねぶたとして変形させたものである」と作者自ら記している¹⁸。つまり、運慶が作った、京都の三十三間堂に祀られている二十八部衆の彫刻のうち、好きな二体を組み合わせねぶたにしたのであった。何らかのストーリーを意識してこの二体を組み合わせたのではなく、純粹に造形として見せることを目的としたねぶたであった。この作品は、田村磨賞に準ずる賞として当時設けられていた奨励賞を受賞する。

これを契機に、翌一九七〇年には鹿内の弟子の一戸泰英が「風神雷神」(に組)を制作する。その翌年、一九七一年には、鹿内一生の「金剛力士」が田村磨賞を受賞したことは先述のとおりであるが、弟子の一戸泰英も「吉野蔵王権現」(陸上自衛隊)を制作する。一九七二年には千葉伸二が興福寺東金堂の広目天を題材にした「広目天と邪鬼」(電電公社)を制作する。一九七三年には「波切不動」(国鉄、川村勝四郎制作)が登場、そして一九七四年には鹿内のライバル佐藤伝蔵も「風神雷神」(日立連合、写真7)を制作し、田村磨賞を受賞する。このねぶたは、風神が緑、雷神が赤を基調にし、色調の異なる二体を組み合わせたという点でも特徴のあるねぶたであった。

こうして仏像(神像)がねぶたの題材として広まっていく。ストーリーを語るのではなく、純然たる造型芸術として見せるねぶたが一つのジャンルを形成し始めたのである。



写真8 佐藤伝蔵作「前田犬千代出世の武勲」(1980)



写真9 鹿内一生作「柳生石舟斎・喝」(1976)

さて、佐藤伝蔵と鹿内一生は、その後もねぶたの歴史に残る作品を制作し、現代のねぶたの潮流を確立する。田村磨賞受賞作を中心に、一九七六年以降の特徴的な作品を見てみよう。

佐藤伝蔵の代表作は、一九八〇年の「前田犬千代出世の武勲」(日立連合、写真8)である。これはねぶた史上初めて、生首を登場させた作品であり、「迫力」を一步進めて「グロテスク」を強調した点で衝撃的なものであった。また、同様に生首を登場させたねぶたに、一九八四年の「長尾新六定景と公暁」(日本通運)がある。ここでは書き割りの墨書きの線に、従来は自然なかすれ具合の「濁筆」を用いたのに対し、たつぷりと墨をつけ、黒々としてかすれない「潤筆」を用いた。

このほか、佐藤伝蔵はねぶた作りの技術を大きく変えている。澤田繁親は、佐藤伝蔵の使った新しい技術として三点を挙げている。まず、骨組みに一切竹を使わずにすべて針金で組んだ。第二に、下絵に彩色を施

して、独立した絵画作品として制作し、さらには下絵をいわば設計図として割り出し計算をした。第三に、面の骨組みを大きく変えた。従来は、灯が入ったときの効果を考へてなるべく骨を減らし、わずか横三本の骨で面を作る、北川金三郎が考案したやり方が主流であった。しかし、それでは面の凹凸がはっきりしないため、佐藤伝蔵は骨を多用して凹凸をつける組み方に変えた「澤田一九八五」。

一方、鹿内一生は、禅の精神を意識した作品を作り始める。その代表作が、一九七六年の「柳生石舟斎・喝」(青森県庁、写真9)である。この流れを汲む作品に一九八〇年の「不動智 沢庵和尚の喝」(に組)、一九八四年の「喝、柳生石舟斎宗厳」(青森県庁)がある。このように精神性を重視したねぶたも、ねぶたの題材をより多様なものにしていったのである。

こうして、北川親子らが築いた基礎の上に、佐藤伝蔵と鹿内一生らが現代の青森ねぶたの様式を確立する。その業績から、佐藤伝蔵と鹿内一生はいずれも一九八六年に青森市からねぶた名人位を授与される。

さて、二人の没後、それぞれの弟子たちのほか、千葉作龍、北村隆(一九四八)、竹浪魁龍(一九五九)らが田村磨賞(一九九五年からねぶた大賞と改称)を受賞している。こういったねぶた師たちも、まずは先人の築いた様式を踏まえた上で、自分なりに創意工夫を加え、新境地を開くべく試行錯誤を続けているのである¹⁹⁾。

(5) 台車・照明の発展

戦後の青森ねぶたの発展を可能にした要因としてさらに付け加えたいのが、台車と照明の変化である。

まず台車を見てみよう。戦前までのねぶたは担ぐのが原則であり、一

人担ぎと四人担ぎの区別があった。ところが実際には、昭和初期にはリヤカー等に乗せることもあったようだ。これが戦後になると、担ぎねぶたは姿を消し、リヤカーに乗せるようになり、さらには専用の台車が出現する。成田敏は「昭和二年の合同運行に加わった国鉄関係団体のねぶたはリヤカーに乗せていたといい、昭和五年ころまではリヤカーがあった。そのころ、旧軍隊の壊れたトラックの軸とタイヤの上に木組を組んだものの上に乗せたねぶたが現れ始めた。昭和二年の日本通運のねぶたがこれだったという」(成田二〇〇、一六三―一六四)としている。時期について裏付けとなる資料はないが、ともかく、戦後は担ぎねぶたが消え、まずはリヤカーを使うようになる。子供ねぶたの場合、一九五五年頃までリヤカーを使っていたが、大型ねぶたは早くから専用の台車に移行していった。

専用台車への移行は、ねぶたの大型化もあるが、照明に電球を使うようになり、その電源としてバッテリーを利用したことが最大の理由である。自動車などのバッテリーは発電量が少ないため、数十個搭載しないと十分な電力が得られない。バッテリーは一つで二〇〜三〇キロの重さがあるので、その重量に耐えるだけの強度のある台車が必要となった。このため、トラックのタイヤと車軸を使った、青森特有の台車が登場したのである。

台車の構造は、一番下に車軸とそれを支える鉄の枠があり、その上に「梁」を二本、前後に渡して、その上にバッテリーを載せるスペースを作る。さらに木の柱を立て、幅七メートル強、奥行き六メートルほどの「天板」と呼ばれる平面を作る。天板の上にねぶた本体が載るのである。²⁰現在では各団体が専用の台車を持っており、祭りの直前に組み立てている。ねぶた本体は毎年新調されるが、こちらは傷んだ部材を取り替えるがら長期的に使用する。

このように、青森ねぶたの台車は、リヤカーから発展したものである。

そのため、車輪が二輪であり、動かす際には綱をつけて曳くのではなく、前後にある「引き手」と呼ばれる棒を約二〇名の引き子が押す。押す力が直接に台車に伝わることから、急停止や急発進ができ、また二輪であることから、旋回、上下動が可能になった。運行の際には、「扇子持ち」と呼ばれる指揮者が手に持った扇子とホイッスルで合図する。それによって信号などの障害物を避けるのであるが、指示が下手だと、運行が遅れたり、衝突してねぶたを壊すことになる。さらには扇子持ちは、回る、蛇行する、前後に揺るなどの細かい動きを指揮する。これが人形に生き活きとした躍動感を与える。そのため、ねぶたは動かし始めた時に初めてその価値がわかるとする見方すらある。従って扇子持ちはねぶたの演出家として重要であり、ねぶたを生かすも殺すも扇子持ち次第であるという意見もある。²¹

また、高さ制限がある中でねぶた本体を少しでも大きく作るために、台車が低くなっていった。このため、天板の下に取りつけられる「高欄」が、三段あったものが一段だけに簡略化された。²²弘前や黒石の組ねぶたが現在でも高欄を数段重ねているのに対し、高欄を一段だけに簡略化したことも青森の台車の特徴である。

次に照明の変化を見てみよう。戦前の青森ねぶたは、本体の照明にロウソクを使用していた。本体の骨組みが針金ではなく竹であったから、細かい細工ができない上、ロウソクの炎が引火する危険もあって、細かく作ったとしてもロウソクを入れられず、ねぶたが大ざっぱな作りになった。当時の様子を今克己は「正月の鏡餅のような形」(『東奥日報』一九五四・八・一)と表現してみせた。それでも、戦前にはねぶたが燃えることは決して珍しいことではなかった。

やがて、ロウソクに変わりアセチレン灯が登場する。しかしそれは長続きせず、電球が導入される。しかし、電球を数百個もねぶたに使うほど経済的に余裕がないため、戦前のねぶたの照明はロウソクが主流で

あった。

戦後は電球が安価になったため、もっぱら電球を照明に使用した。電球は引火の心配がないため、骨組みに針金を使うこととあいまって、細かな細工が可能になり、また隅々まで明るくなったのである。このことがねぶたにもたらした変化を、あるねぶた師は「電球革命」とさえ表現した。そして蛍光灯も使われるようになり、さらに明るくなった。

電球を点すためには電気が必要である。このため、電源として、まずはねぶた本体の台車にバッテリーを積み込んだ。自動車のバッテリーが主に使われたが（船舶や客車のバッテリーを使った団体も一部あったようである）、これは一個当たりの発電量が少ないため、ねぶた本体を照らすに十分な電力を得るためには、数十個のバッテリーを積んで接続する必要があった。しかしこれは決して簡単な作業ではなく、「毎日出陣前のあの忙しい時、二十〜三十キロもあるバッテリーを四十個も積むのは、本当に大仕事でした。あのバッテリーは一人で持つと腰骨がつぶれる思いがするほど重いのですから。そしてその四十個のバッテリーを結線するのもまた一苦勞だったんです」（私たちのねぶた 一九九三、六）という回顧談がある。また、運行を終えてねぶた小屋に戻ると、翌日の運行に備えてただちにバッテリーを充電しなくてはならない。バッテリーを降ろすのも同様に重労働であった。

しかも、バッテリーの発電時間はさほど長くなかった。例えば一九五九年に『東奥日報』に掲載された関係者の座談会では、当時の様子が次のように語られている。「バッテリーの保てる時間が二時間で、一番制約される。塩町や栄町からもこちらへ持ってこいと言われるが、それではバッテリーがもたない。日没が七時一五分頃で、古川陸橋の下で明かりを入れ、新町―大町と通り、途中下新町の交番前で審査が行われる」（『東奥日報』一九五九・七・二二「座談会 青森ネブタと観光資源」より、青森観光協会・室津哲三氏の発言）。ここではバッテリーの持続

時間を二時間としているが、これでは夜遅くまでの運行は行えるはずもなかった。また、バッテリーをつなぐ線がはずれるなどして運行中の停電も珍しいことではなかった。

バッテリーが不便であることから、一九八〇年頃から各団体が一齐に発電機を電源として使用し始めた。最初は小型の発電機を一〇台ほど載せたという。しかし運行に携わる人々がガス中毒を起こさないよう、排気ガスをどこに排出するかが問題であった。また騒音も大きく、扇子持ちの声が引き子に聞こえなくなったという。

やがて建設用の大型発電機の導入により、一台で必要な電力をまかなえるようになった。その大型発電機も次第に小型・軽量化していった。また、発電量が増えたため、使用できる電球の数も増加した。バッテリーを使っていた一九七三年頃には、「現在では三〇Wの電球を三百〜四百個使っている」（長沢 一九七三、五二）という状態であったが、現在では八百個が平均的な数である。中には千二百個使ったねぶたすら現れた。²³

現在見るような青森ねぶた本体の様式が確立するまでには、このような経過をたどっているのである。

②組織の変化

（一）地域の大型ねぶたの減少

青森ねぶたの特徴は自由参加にある。誰でもハネトに参加できることは良く知られているが、ねぶたの運行も同様である。大型ねぶたは近年では台数制限の関係から、新規参入が制限されているが、ほんの少し前まで、一定の条件さえ満たせば誰でも出すことができた。子供ねぶたや地域ねぶたは今でも自由に出すことが出来る。逆に出さねばならない義務は誰にもないから、簡単に休んだりやめたりできる。私は、戦後の青

表2 大型ねぶた運行団体数・組織のタイプ別集計

年度(西暦)	51	52	53	54	55	56	57	58	59	60	61	62	63	64	65	66	67	68	69	70	71	72	73	74	75
町内会・青年団	18	9	8	9	7	4	3	8	3	3	5	4	1	1				1							
消防団	1	4	5	3	3	3	3	3	3	3	5	3	2	2	2	1	1	2	1	2	2	2	2	2	2
同業者組合	2	1	3	2	2	4	3	3	2	1	3	4	3	3	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	1
商店・地元企業	4	5	3	8	5	2	1	2					3	2	2	1		1		1			1	1	1
行政・公的団体	2	3	2	4	4	3	2	3	2	3	4	4	4	5	6	6	5	4	5	6	6	6	7	6	6
学校																					1		1		1
全国企業	1	1	2	2	1	1	1	1	1	1	2	1	1	3	2	3	4	3	6	5	3	3	5	3	2
同好会		1														1	1	1	2		1		1	1	1
宗教団体																			1						
合計	28	24	23	28	22	17	13	20	11	11	19	16	14	16	14	13	13	14	16	16	15	13	19	15	14
行政・公的団体と 全国企業の比率(%)	11	17	17	21	23	24	23	20	27	36	32	31	36	50	57	69	69	50	69	69	60	69	63	60	57

年度(西暦)	76	77	78	79	80	81	82	83	84	85	86	87	88	89	90	91	92	93	94	95	96	97	98	99	00
町内会・青年団																									
消防団	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
同業者組合	1	2	2	2	2	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
商店・地元企業	1	1		1		1							1	1			1								
行政・公的団体	6	6	6	6	6	6	6	6	7	7	7	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8	8
学校		1		1		2	1	2	1	2	1	2	1	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
全国企業	3	3	5	5	6	6	6	6	6	7	7	7	7	7	9	9	9	10	10	10	10	9	10	9	9
同好会	1	1	1	2	2	3	3	3	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
宗教団体									1																
合計	14	16	16	19	18	21	19	20	19	21	20	22	22	23	24	24	25	25	25	25	25	24	25	24	24
行政・公的団体と 全国企業の比率(%)	64	56	69	58	67	57	63	60	68	67	70	68	68	65	71	71	68	72	72	72	72	71	72	71	71

森ねぶたの変化を調べるため、一九四四年から一九九九年までに制作された大型ねぶたの一覧表を作成したが、ねぶたを運行する団体が時期により大きく変わっていることが明らかになった。ここでは紙幅の都合上、一覧表の再録は避け、組織別に集計した数だけを表2に掲げた。

戦後の青森ねぶたは、一九五一年以前は資料が整っていないため断定的なことは言えないものの、早い時期には町内会、青年団、消防団、それに商店・地元企業が運行団体のほとんどを占めていたようだ。例えば一九五二年には、新聞の事前報道では三三団体が出陣予定で、「青年団七、少年団六、会社・事業所五、町内会四、消防団四、官公庁三、劇場一、その他、で経済界の不振が会社・事業所などの運行にブレーキをかけている」(『東奥日報』一九五三・七・三〇)といった様相であった。主催者に届け出る際、ねぶたの大型と小型を区別し始めたのは一九五三年からであるが、この頃にはまだ、町内会、青年団、消防団といった地縁集団が主力であった。しかしこういった団体は、必ずしも毎年ねぶたを出したわけではなかったようだ。戦後の物資が乏しい時期であり、大型が出せなければ小型ねぶたを出したり、あるいは休んだり、柔軟な対応をしていた。何年も続けて出す団体はむしろ例外であり、数年に一回出すような団体が多かった。宗教色のない祭りであるから、ねぶたを出すことを義務と感じていた団体はほとんどなかったであろう。

さて、こういった地縁集団が出す大型ねぶたは、一九五五年までは一〇台以上あったが、この頃から徐々に減り始める。そして一九六三年には三台にまで激減し、一九七〇年以降は、二つの消防団(に組と消防第二分団)が企業と協力関係を結んで出陣するだけになる。

一九六〇年代に、地域を母体とする団体が大型ねぶたを諦め、小型ねぶたに転じるか、あるいは出陣を断念していったのは、経費の高額化が最大の原因といわれている。経費の記録はあまり残っていない上に、経費のかけ方は団体によりさまざまで、なかなか平均的な数字を出すことができないのであるが、新聞記事から金額を拾ってみよう。

まず、一九五五年には次のような記事がある。「三間以上のねぶたになると製作費は五〇十万円、バッテリーと配線で五万円、人夫賃二万円というのが常識である。ハネトは普通で約三百人ともなれば、期間中の賄い費は少な目に見ても十万円。ところが大口を抱えているところでも二十万円の祝儀は一つか二つが精々。さりとて『小さいねぶたでは…』というのが共通心理で、結局飲み食いの費用を切りつめるのが精一杯。去年のように『六十万円使った』というのは出そうもなく、つつましいねぶたになりそう」(『東奥日報』一九五五・七・二四)。ここにある費目別金額を合計すると、最低限の経費は二五〇万円になる。記事では、前年のように経費をかけたねぶたは出そうもないと推測している。一九五五年は、地縁集団のねぶたが減り始めた年であり、また全体でも二二台で、前年の二八台から大きく減った年である。出せなかった団体もあれば、出すにしてもつつましいねぶたになったのであろう。

一九五八年には、「ねぶた一台の平均経費は大人ねぶた四十五万円、子供ねぶた八万円といわれた」(『東奥日報』一九五八・八・九)という記事がある。一九五五年と金額的にはさほど変わっていないようである。そのあとしばらく金額に関する新聞記事がなく、ようやく登場した一九六六年になると、「大型ねぶたがなぜ会期の五日間を毎日出ないかという、五日間ぶつとおし出ると運行に要する経費が十万円位オーバーするといわれるからだ。運行費は一日三〇五万円とみられており、これに制作費などを合わせると百五十万円から二百万円。豪華なものとなるとそれ以上の予算がかかる」(『青森民報』一九六六・八・六)という。

仮に平均を二百万円とすると、一一年前の三〇万円の約七倍の高騰である。この頃にはすでに地域の大型ねぶたが激減しているが、その理由が推測できる金額である。

さらに一九七二年には、「一台あたりの製作費は六十〜七十万円、高欄と呼ばれる台から下の部分、乗せ歩く車なども含めるとざっと百万円。ハネトは最低でも五百人、最高だと県庁などのように三千人近くにも達するが、運営費は三百万円から五百万円というから、町内ごとに出すのはまず無理」(『東奥日報』一九七二・八・三)ということになる。こうして地縁集団が大型ねぶたから撤退していくのである。

(2) 企業の参入

前節では一九六〇年代に地域ねぶたが減少したことを述べたが、ほぼ同時期に、同業者組合や商店、地元企業も減少していく。これに代わって大型ねぶたの主流を占めるようになるのが、官公庁や公益性の強い団体などを母体とするねぶたである。その中では、電電公社や東北電力などが早くから優れたねぶたを出していた。そこへ市役所(一九五八年)、自衛隊(一九六〇年)、県庁(一九六一年)、国鉄(一九六四年)、青年会議所(一九六六年)、郵便局(一九八七年復活)などが加わるのである。

さらに、全国規模の企業も参入を始める。もっとも早いのは、戦前からねぶたを出していた日本通運であるが、この場合は企業を母体としていながらも地域や取引先などの協力が早くから見られた。そして「町内ねぶたの衰退と共に町内に参加していた人々も逐年加わり、日本通運名入りユカタを誇り、そして毎年市民の祭りに参加し続けてきた」(八代一九七七)というように、従業員だけでなく取引先や同好者の熱心な参加があったのである。続いて日立連合(一九六〇年)、大洋漁業(一九六四年)、青森ナショナル(一九七四年)、サンロード青森(一九七九年)、日産青森(一九八〇年)、ヤマト運輸(一九八五年)、青森菱友会(一九

九〇年）、ビブレ（一九九三年）と、全国企業のねぶたが増加していく。行政や公的団体、そして全国規模の企業が、大型ねぶたの半数を超えるのは一九六四年のことである。この年に一六台中八台を占めたこれらの団体のねぶたは、以後構成比で五割を割ることなくコンスタントに出陣し、一九九〇年代に入ると七割の高水準を維持する。

企業が出すねぶたに対しては「広告が目立ちすぎる」という批判がある。このため企業のねぶたは、広告・宣伝だけを目的としたものと思われがちだが、決してそれでは長続きしない。ねぶた出陣を長く続けるにはそれなりの理由がある。

まず、ねぶたは従業員や家族の慰安の手段であり、またメンバーの親睦を図る格好の手段である。企業とねぶたのかかわりを報道した新聞記事を引くと、「職員や仲間たちのレクリエーションの場としてこれほど最高のものはない」（『東奥日報』一九八二・七・一一）、「企業グループ内や取引先との団結を図れる」（『東奥日報』一九八二・八・四）という。そのため企業では、ねぶたの経費を交際費や福利厚生費として計上しているケースもある。実際に行政や企業のねぶた事務担当者を見ると、人事や福利厚生部署の方が多い。

また、大規模な企業グループや官公庁では、ねぶた出陣の方が他のレクリエーションよりも金銭的に安上がりなことがある。「官公庁の互助組織も民間企業も、大型ねぶたの運行は独自に運動会を開くよりは経費的に安くつくという」（『東奥日報』一九八二・七・一一）。例えば一九八二年には、八社からなるある企業グループでは、ねぶた運行に約九百万円かかったというが、取引先からの寄付もあり、グループ八社の負担はそれぞれ六〇～七〇万円であった。ところが一社で社員運動会を開いても百万、二百万円とかかるのだという（『東奥日報』一九八二・八・四）。

こういう点も、企業にとってねぶたを出すメリットなのである。前節では、地域のねぶたが経費の高額化により撤退していったことを

述べたが、高額とはいっても、行政や企業には十分負担できる金額であった。実際の金額は団体により千差万別で、簡単に平均的な数値を出すことはできないが、ある企業の約三〇年間の経費の推移を、決算書からグラフ化して示しておく（図一）。

結局のところ、地域ではなく企業や行政だからこそ多額の経費負担が可能であったわけで、地域に代わって企業がねぶたを出したことが、青森ねぶたを発展させる経済的な裏付けになったと考えられる。

行政や企業は、ねぶた出陣の予算を組む必要があるため、出すかどうかをかなり早い時期に決定する。高額の経費をかけてもねぶたを出すメリットに気づいた団体は、一度出すと、毎年コンスタントに出し続けることになる。こうして一九七〇年代には、大型ねぶたを出す団体は「出し続ける」ことが原則になり、ねぶた出陣が恒例行事になる。これに対し、一回に限定した参加の仕方は例外的なものになってくる。

この結果、大型ねぶたの台数は、一九七〇年代には約一五台で推移するが、一九八〇年代には約二〇台に増加する。一九九〇年以降は二四～二五台に定まり、参加する団体も決まってくる。

（３）「主催者」

さて、戦後復活したねぶたは、港まつりというイベントの一部に位置づけられた。その名称も、一九四七年には青森市復興港まつり、一九四八年から五七年までは基本的に青森港まつりであった。内容もさまざまなものを含み、市を挙げての夏の祭典が繰り広げられたのである。行事の主催者も、行政主導と言ってよいものであった。一九五八年に至ってようやく、青森ねぶた祭の名に改まるのであるが、港まつりとして復活後一年間続いたことの影響が、特に組織面に見られる。

ねぶたが本格復活した一九四七年には、イベントを主催したのは青森市と青森海運局であったが、一九四八年からは、青森市土木課内の「青

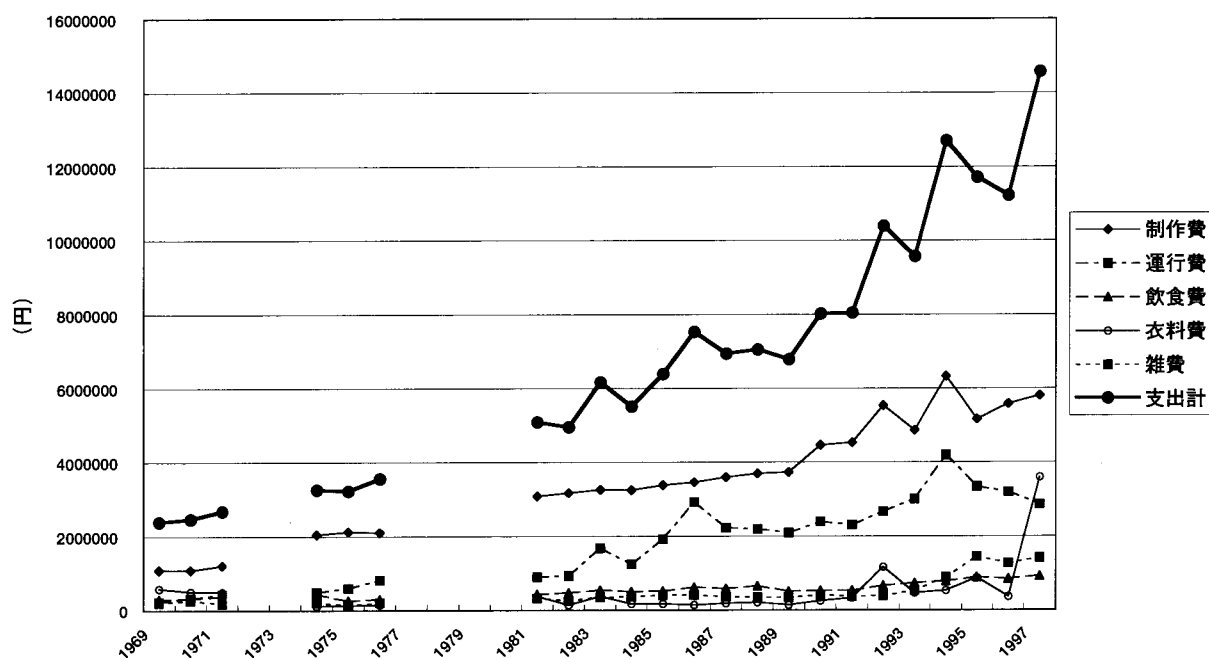


図1 ある運行団体の経費

森文化観光協会」が港まつりを主催した。一九五〇年には青森市経済課に観光行政が移管される。そして一九五二年には、観光事業を市役所から切り離して青森商工会議所内に移し、「青森観光協会」が組織された。市役所から切り離した理由としては、ねぶたの審査をめぐって市会議員からの干渉が激しかったためとされている。そして市役所は共催団体になった。「青森観光協会 一九七七」

青森観光協会は商工会議所内に置かれていた。このため商工会議所も主催者に加わり、事務局こそ青森観光協会に置かれたものの、主催団体は青森観光協会、市役所、商工会議所の三者共催²⁶⁾になっていく。このため、例えば一九五六年の「昭和三十一年度『青森みなと祭』役員名簿」を見ると、市長が名誉大会長、商工会議所会頭が名誉副大会長を務め、観光協会会長が大会長となり、副大会長には市会議長、同副議長、市助役、商工会議所副会頭らが名を連ねている。また、後援団体として、青森青年会議所、東奥日報社、青森民報社、青森放送局、ラジオ青森、青森市教育委員会、青森市交通部、盛岡鉄道管理局青森駐在部、青森駅、国鉄青森自動車営業所、青森市消防本部、日本交通公社青森営業所、東急観光東北事務所、青森市旅館組合、青森専門店会、青森商店会、青森市写真材料商組合、東北海運局青森支局、青森海上保安部、青森海員組合が名を連ねている。このように、主催三団体を、全市的にバックアップしていく組織が港まつりの段階で作られ、それがねぶた祭に引き継がれていくのである。

さて、主催者はねぶた祭の運営に際して、さまざまな委員会を組織して作業を分担した。その原型は、港まつりの時期に既に出来上がっていたようである。そうした組織形態を示す資料のうち、管見に及んだ最古のものは一九五五年の「開港五十周年記念『青森港まつり』役員名簿」であるが、業務内容と行事にに応じて、総務部、宣伝部、ねぶた運行・仮装コンクール部（運行班と審査班に分かれる）、ねぶた海上運航と記念

行事部、町内舞踊大会、町内対抗装飾コンクール、森山弥七郎翁墓前祭、新市域芸能大会、花火大会、全国チンドン屋大会、商工カーニバル、照明コンクール、青森芸妓手踊大会、県下民謡手踊大会、港まつり写真コンクール、以上一六の部署ごとに担当者を決めていた。港まつりが多様な行事を含むイベントであったことがよくわかる構成である。それぞれの部署に配置された担当者は、主催三団体と後援団体の関係者である。このうち青森観光協会については専従職員も少なく、役員に名を連ねた市内の観光関連業者が担当していた。

こういった組織形態はねぶた祭に名称が変わっても基本的に継承される。例えばねぶた祭に名称変更した一九五八年は、総務委員会、宣伝委員会、開会式、森山弥七郎墓前祭、ねぶた海上運航と海上記念行事委員会、商工カーニバル、移動演芸大会委員会、音楽隊市街大行進委員会、照明コンクール委員会、町内舞踊競演委員会、県下獅子舞市街大行進委員会、ねぶた写真コンテスト委員会、広告博みこしコンクール、花火大会、第一部ねぶた連合運行委員会、第二部ねぶた連合運行委員会、ねぶた奨励委員会、以上一七の部署に分かれていた。²⁷ 港まつりの時にあったさまざまな行事は徐々に整理されていくが、組織形態の基本は変わらず、一九七〇年になっても、総務委員会、宣伝委員会、渉外委員会、前奏パレード委員会、子供ねぶた委員会、ねぶた運行委員会、奨励委員会、海上運行委員会、前夜祭委員会、花火大会、以上一〇の委員会に分かれていた。²⁸

さて、一九七七年に青森観光協会が任意団体から社団法人化し、同時に主催三団体が「青森ねぶた祭実行委員会」を結成して主催団体となった。そして委員会も、総務委員会、奨励委員会、運行委員会、渉外委員会、海上運航委員会の五委員会に集約されていた。²⁹

次に、主催者の活動内容の特徴を見てみよう。主催者が祭りの運営以外に行った活動として、まずはねぶたのPR活動がある。一九六〇年代

に入ると、それまで青森県周辺でしか知られていなかったねぶたが、より広く注目を集め始める。すなわち、一九六一年と六二年には、東京浅草の国際劇場でのSKDレビューにねぶたが取り上げられた。また一九六一年には、松竹映画「愛と悲しみと」と、NHKの人気番組「バス通り裏」にねぶたが登場した。こうしたことから青森観光協会では一九六二年、ねぶたを青森観光の目玉として宣伝すべきであるとし、宣伝のための観光キャラバン³⁰を東北六県に派遣したのである。「青森観光協会一九七七」。この観光キャラバンが東北を回った際に、青森ねぶた、仙台七夕、秋田竿燈を「東北三大祭」というセットにする案が出たといわれ、やがてこの三つの祭りを見て回るツアーの成立に至った。³¹ このように、一九六二年の方針変更は、ねぶたの観光化を促進するターニングポイントになったのである。そして、その翌年の一九六三年には、青森市役所内部に観光課が設置され、観光を担当する行政側の組織も整備されていた。また、ねぶたの遠征が盛んに行われるようになったのもこの頃からである。³²

こうした活動の結果、観光客が急増する。その受け入れのために、一九六八年からは「特別観覧席」が設置された。それ以前から団体客のための観覧席は設けてあったが、「県外の団体客に対しては青森市役所、日銀青森支店付近の国道の歩道にゴザを敷いて見せているが、県外客からは『有料でもよいから観覧席を作るべきだ』と指摘され続けたことから、県庁―裁判所前までの国道北側の歩道に、有料観覧席を設けることになった。県からは歩道の半分、三メートル分しか許可されていないため、この観覧席は一回二〇〇人しか収容できない。団体客だけでもあぶれるため、本部では昨年のように市役所、日銀青森支店付近と有料観覧席前の空いている歩道に無料の観覧席を作る計画を進めている。」
『東奥日報』一九六八・七・三二」というのが最初の年の様子であった。料金は一人二百円であった（『広報あおもり』一九六八年八月一日号）。

これは大好評を博し、「今年から実施することになった県外客のための有料観覧席もすでに超満員。あわててムシロを敷いただけの無料席を用意するはめになった。定員が一日延べ二千人の有料観覧席は、申込だけで、三日六二〇人、四日九九七人、五日二一三人（無料が八九一人）、六日二二二〇人（同二九一四人）、七日一〇〇人となっており、最高潮の五、六日は完全にオーバーしている。」（『東奥日報』一九六八・七・二四）と、七月下旬の段階で満杯になってしまった。

こうして、有料観覧席が毎年恒例化していく。一九七三年には「主催者側の青森商工会議所では、市役所前から県庁前国道沿いのイス席、棧敷席ともに三五〇〇人、座布団席一〇〇〇人、合計一日八〇〇〇人収容の有料観覧席を設けた。これは阿波踊りの観覧席六〇〇〇人を上回る人数。県外からの団体観光客だけでざっと七万人になった。」（『東奥日報』一九七三・八・八）。そして観覧席の売り上げが主催者の予算に大きなウエイトを占めるようになっていった。予算上は、観覧席なしには「青森ねぶた祭」という行事は成り立たないほどなのである。³⁴⁾

（4）運行団体協議会の結成

前項で述べた「主催者」は、実際にねぶたを出す団体ではない。あくまでも祭り全体を運営し、観光客との対応など、外部との折衝を行う団体である。³⁵⁾

ねぶたを実際に出したのは、既に述べたように、まずは町内会、青年団、消防団などの地縁集団であった。そこに行政や全国規模の企業が参入していった。行政や企業は、議会や本社などの承認の下に、早くから多額の予算を組んで運行するケースが多い。こうした団体が毎年コンスタントに出陣し始めると、その発言を主催者も無視できなくなってくる。そして、そうした運行団体の連合組織が、主催者の交渉相手として登場するのである。

ねぶた制作に際しては、遅くとも六月から八月までの二ヶ月以上にわたって、ねぶた本体を組み立て、収容する小屋が必要になる。日本通運、東北電力、国鉄などは、自社の敷地内にねぶた小屋を建てていたが、ねぶたを作る用地を確保できない団体は、空き地を共同で使い、小屋を連ねるようになっていった。これを「ねぶた団地」と通称している。

ねぶた団地の誕生時期は定かでない。おそらく一九七〇年頃に、柳町通りに誕生したものと思われる（後述）。その後、一九七五年から八〇年までは野脇中学校跡地（現、青森市文化会館）、八一年から九一年までは青森中央高校跡地（現、中央西公園）を使い、九二年以降、現在のように青い海公園を使うようになった。

このように、多くの団体が場所を共同利用していく過程で、一九七七年頃に、ねぶた団地の防犯を主目的として、使用団体により「団地運営協議会」が結成された。一九八〇年には、この団体が発展して、主催者との交渉団体として「青森ねぶた運行団体連絡協議会」が発足した（一九八五年に「青森ねぶた運行団体協議会」と改名）。さらに一九八七年、制作・囃子の二委員会を設け、制作者や囃子方も加盟した。こうして、実際にねぶたを作り、動かす人々がすべて加入する団体となり、主催者にとって無視できない存在になっていった。

運行団体協議会は、実際にねぶたを出す立場から主催者にさまざまな要望を出し、行事の運営をめぐって交渉し、当事者としての地位を確立していった。例えば、特に問題となったのが、運行団体への補助金と、合同運行の台数制限である。補助金については、主催者は減らしたい、各運行団体は増やしたいというせめぎ合いの中で、運行団体を代表して主催者との調整の窓口となり、双方の納得のいく金額を導き出すべく努力した。

合同運行に関しては、主催者や警察は、国道をコースに使用するため運行台数を一日一六〜一八台に制限したいと主張した。これに対し、ね

ぶたを出す団体としては毎日でも出したい。例えば、参加台数が二〇台だった一九八三年には、「当初、主催者側は午後九時終了の線で、五、六日の合同運行にも一五台だけ出陣の運行計画を提出した。この計画には、二〇台の参加を予定している運行団体側から『祭りのヤマ場に運行希望団体の出陣を切り捨てるのでは、祭り本来の趣旨に反する』とクレーム。結局、この運行計画は、運行団体側の主張が通った」（『東奥日報』一九八三・五・一一）。その後もねぶたの台数が増加していくが、運行団体協議会が運行シュミレーションを作って運行台数制限案をまとめ、その案を基本に一日あたりの台数を決めてきた（現在では一日二二台以内）。そして運行団体協議会は、決定した台数にあわせて出場団体と運行順序を決め、スムーズな運行のために全体を統制し、自主警備を行い、障害物の撤去を交渉するなど、ねぶた運行実務の中心になるに至った。

また、一九九二年の新ねぶた団地建設に際しては、運行団体協議会も計画立案に関与した。このねぶた団地は、市民や観光客が制作過程を見ることが出来る施設として、青森駅からほど近い、青森観光物産館「アスパム」横の青い海公園に、五月から八月まで巨大な仮設テントを二四建てたものである。仮設テントと言っても恒久的な使用を前提にしており、「ラッセランド」という愛称もついて、現在ではこの場所がねぶたの制作場所として定着している。運行団体にとっては、それまで三カ所程度に分散してきたねぶた制作場所が一カ所にまとまり、当時ねぶたを出していた二四団体が一カ所で制作できるようになった。完成後は、運行団体協議会が団体側の窓口として、ねぶた団地の所有者である青森観光協会と覚書を締結し、使用料金など使用に関する要綱を定めた。

また、一九八一年からは前夜祭を主催したが、これについては一九八四年から青森観光協会との共催になった。

さて、ねぶたを出す団体は徐々に増加するものの、一九八〇年代後半

になると、運行台数制限から、すべての参入希望を認めることが困難になってくる。しかし参加を希望する大企業は引きも切らず、特にライバル企業が出陣していればなおさらで、家電、ビール、運輸などの業種では強く参入を希望する団体が出てきた。^③しかし、新規参加団体の取扱いについては明確な基準がなく、トラブルの元にもなったようである。当時の様子がかがえる資料に、運行団体協議会が一九八七年六月一日に主催者に出した「要望書」がある。それによると、

「一・新規参加の可否については、協議機関を設け対応する。

二・協議機関の構成は、青森商工会議所・青森観光協会・青森市・青森ねぶた運行団体協議会、及びその他の関係者により組織し、次の手順に従い対応する。

①新規参加希望団体より申出があった時は、個々に接することなく直ちに協議機関の窓口責任者（別途選任）に取次ぎをする。

②窓口責任者は、その申出の緊急性に応じて協議の場を配慮する。但し、前以て第一次、第二次、最終協議の場（開催日）を設ける。

③申出の団体に対し、遵守事項として『ハネトの自主規制・花笠着用・運行時の順序・時間』等の誓約、制約となる事柄を伝達し対応を求める。

④上記の遵守事項の回答を得た上で、協議し参加に対する設定をする」

要するに、新規参加の申し込みに対しては、一定条件を課した上で、主催者と運行団体協議会の協議により決定して欲しいという要望を出したわけであるが、逆に言えば、それ以前はこのような決まりがなく、対応がある意味で場当たり的であったようである。

こうした要望書の提出などを経て、大型ねぶたの参加申込みに関する取扱い基準が明文化されたのは、現ねぶた団地が完成した一九九二年である。青森ねぶた祭実行委員会が発行した「青森ねぶた祭大型ねぶた参

加申込みに関する取扱い基準」と題するこの文書は、まず趣旨を「重要無形民俗文化財に指定されている青森ねぶた祭の歴史と伝統を守りかつ市民参加による郷土意識の高揚を図るとともに、ねぶた祭の秩序を維持しつつそう充実するため適正な参加台数などに関し取り扱い基準を定めるものである」として、台数制限の理由を次のように述べる。

「①一団地一コースを基本としており、現在のラッセランド内では新規の制作小屋を確保するのは難しい。

②現在の交通事情を考慮し、運行コースである国道の規制時間を協議の結果二時間を基準としている。

③すべての参加団体が毎日運行することが望ましいものの、最近新規参加団体の増加により一日の参加台数を二〇台以内に制限し調整する。」

こうした理由（詳細は後述）から、「まつり所定の総参加台数は二四台以内とする。止むを得ない事情がある場合は、二五台とすることができ」と、台数制限が課せられる。そして参加団体の選定方法は次のようになっている。

「(一) 所定の台数および団体については、従前の恒常的な参加実績を踏襲することを原則とする。従前の恒常的参加実績団体が休む場合はその旨を提出する。」として、まずは「恒常的参加実績団体」を優先することを明確化する。新規参加については、「(二) 参加申し出団体台数が所定の台数を越えた場合は、一台に限り関係者との協議又は、恒常的参加団体以外の申し出当事者間の抽選により選定する。」(三) (二) により選定された参加団体については、当該年度のまつりのみ有効とし、基本的に制作小屋、許認可関係等については当事者負担とする。」との規定から、一台だけは認めるとの方針が示された。

ここに至って、さまざまな事情はあるにせよ、ねぶた団地建設時に運行していた二四団体が「恒常的参加実績団体」としていわば特権集団化

し、以後の新規参入を困難なものにしていったのである。

さて、「恒常的参加実績団体」も諸事情からねぶたを出せないことがある。その場合、休むことができるのは一年だけとされ、二年連続して休むと「恒常的参加実績団体」としての特権を失うことになった。現在までにこれが適用されたのは一例だけである。一九九九年と二〇〇〇年の運行を休んだコマツが、これによりねぶたから事実上撤退したのであった。これに代わって、一九九三年から「例外的参加」とされたにもかかわらず参加し続けたビブレが、運行団体協議会の一員に加わった。

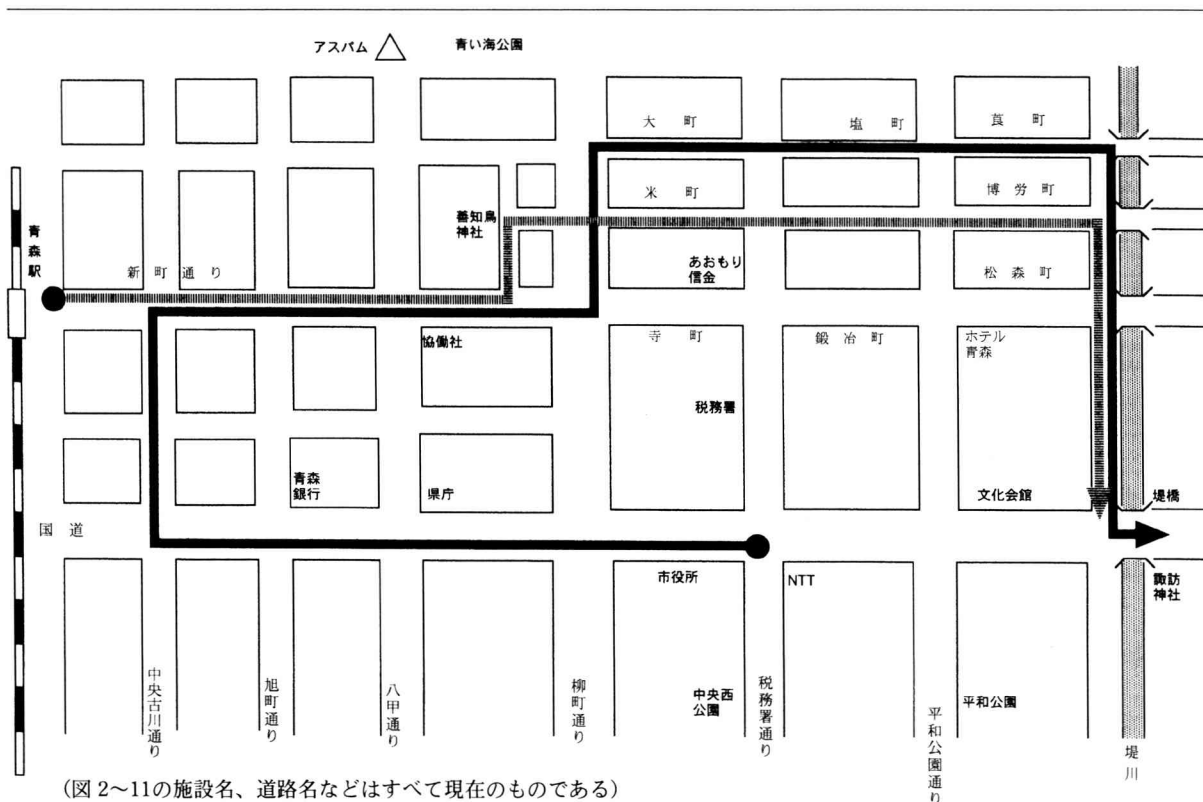
③ 運行形態の変化

(1) 合同運行の増加^⑧

大正期のねぶた運行は、旧暦七月三日から五日まで自由運行、六日が夜の合同運行、七日が昼の合同運行というのが恒例のスケジュールであった。このスケジュールは戦後も受け継がれるが、徐々に合同運行の日数が増加する。

まず一九五三年には、主催者が大型ねぶたと小型ねぶたを区別するようになる。そして合同運行日を分け、小型（子供）ねぶたは三、四日、大型ねぶたは六、七日とした。そして観光化元年ともいえる一九六二年からは、五日にも大型ねぶたと子供ねぶたの合同運行が行われた。合同運行日以外は自由運行であった。とはいえ自由運行日はもちろんのこと、合同運行も運行を強制するものではなく、運行するかどうかは各団体の自主性に任されていた。そのため、運行経費を節約するために、自由運行日は休む団体も多かった。

そのため、観光客が増え始めた一九六〇年代後半にトラブルが起きる。一九六五年には、三日の「子供ねぶた連合運行、大人ねぶた自由運行」にまったくねぶたが出なかった。一九六七年にも、三、四日の「子供ね



(図2～11の施設名、道路名などはすべて現在のものである)

図2 大型ねぶた運行コース1953 (—— は旧6日 - - - - は旧7日)

ぶた連合運行、大人ねぶた自由運行」に大型ねぶたが出ず、観光客の苦情を招いた。

こうしたことから、一九六八年には八月三日から七日の全日程で大型ねぶたを含む合同運行を実施した。すなわち、三日は子供ねぶた一八台と大型ねぶた四台、四日は子供ねぶた一八台と大型ねぶた七台が合同運行を行った。五、七日は従来通り大型ねぶた合同運行であった。そしてこの形式が恒例となっていく。それと同時に一九六八年から、有料観覧席の発売が始まるのである。

この頃から、道路事情や交通規制などの関係から大型ねぶたは自由運行を行わず、合同運行にのみ出るようになっていく。このため、ねぶたの運行を見ることができずのは、合同運行のコースだけになった。

なお、一九七九年には、祭りが一日延長されて八月二日開始となった。これによって、合同運行を六日間行う現在の日程が確定するのである。

こうして大型ねぶたの運行は、回数こそ増えたが、決められた時間と場所で見ることができなくなってしまう。このことは、観光客にとっては非常に便利であるが、運行コースの大部分が有料観覧席に占領され、市民がねぶたを見る機会を奪ってしまうという一面も生じてきた。

(2) 度重なるコース変更

青森の街は、陸奥湾に沿って東西に細長く広がっている。東西方向の目抜き通りは、国道四・七号、新町通りなどが主なもので、ねぶたの合同運行も、こうした通りを東西方向に動くのが中心であるが、さまざまな事情からコースを変えてきた。

戦後間もなくの大型ねぶた合同運行コースは次のようになっていた。³⁷⁾ 例え一九五三年(図2)を見ると、まず六日(旧暦七月六日。新暦では八月十五日であった)は、国道と税務署通りの角が集合場所で、午後五時に出発し、国道を西に進んでいき、中央古川通りで右折し北へ向か

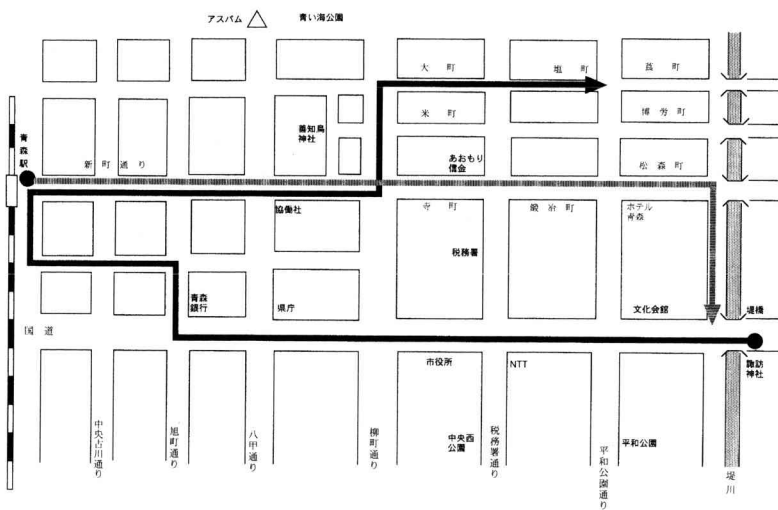


図3 大型ねぶた運行コース1960
(— は6日 は7日)

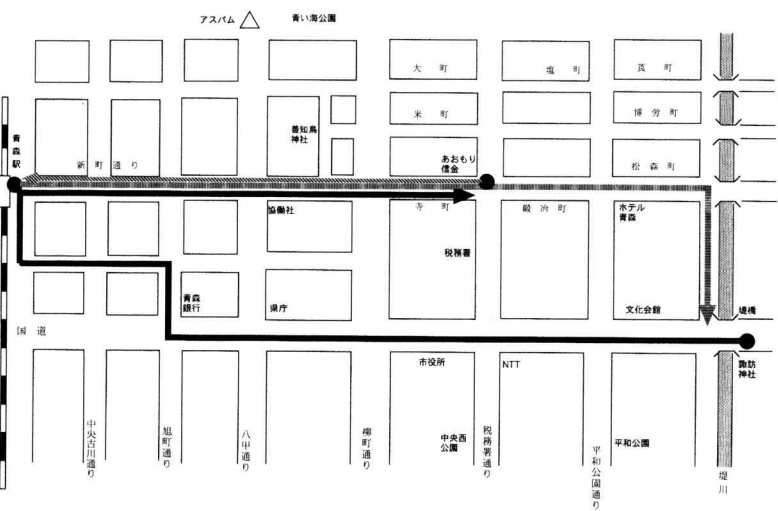
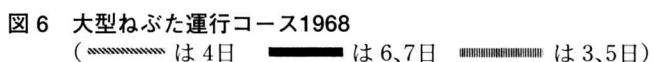
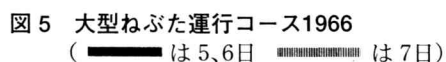


図4 大型ねぶた運行コース1962
(— は5日 — は6日 — は7日)

う。市内随一の繁華街である新町通を東進し、柳町通りを左折。さらに大町で右折して堤川に出て、堤橋を渡って諏訪神社前で解散である。七日(旧暦七月七日。新暦では八月十六日)は、九時に青森駅前に集合し、新町通りを東に向かい、善知鳥神社で左折し、さらに右折して米町を通って堤川に出て、堤橋で解散した。このように一九五〇年代には、夜の合同運行である六日は、市役所付近から国道を西に進み、古川付近で北上、新町通を東に進み、堤川に至って堤橋で解散というのが基本コースであった。昼の合同運行である七日は、六日とは異なるコースをとった。青森駅前を出発し、新町通りを東へ向かい、柳町通りを北上して米町を東に向かい(一九五六年は柳町を北上せずに新町をそのまま直進)、堤川沿いに南下して堤橋で解散した。このコースの特徴は、まず二日と

も解散地点が堤橋である。これは、かつては七日(ナヌカビ)にねぶたを堤川に流したこの名残りであり、この時期にはすでに流すことはなかったものの、川との関連がまだまだ意識されていたことがうかがえる。また、二日とも繁華街である新町通りと、大町や米町といった青森の旧市街ともいべき一帯(柳町通りから東側、現在は本町という町名がついている)を通過しており、そこが街の中心であったことがうかがえる。一九五七～五九年は資料を発見できなかったため不詳であるが、一九六〇年代に入るとコースが変わってくる。まず六日の出発点が東に移り、堤橋を越えて諏訪神社前になった(一九六〇～六五)。一方で解散場所は少し西寄り(青森信用金庫前)に移った。また青森駅前を通るように若干のコース変更した年もあった(一九六〇、六二～六六)。この時期に



287

さて、ねぶたの運行を規定する要因として重要なのが、交通規制との

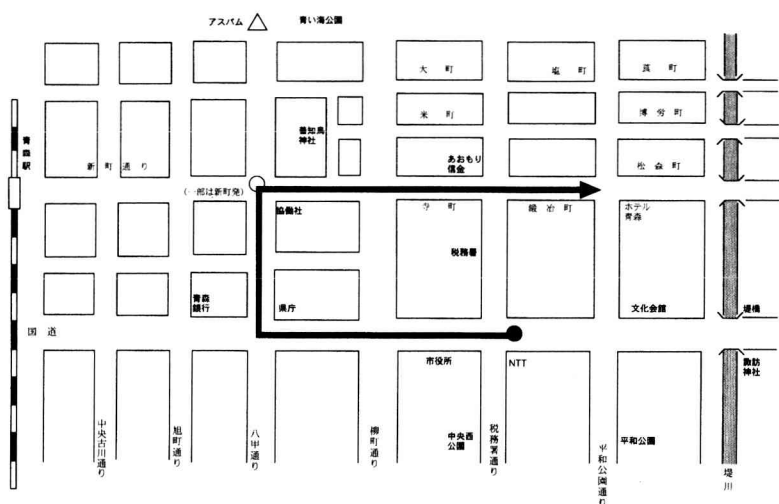
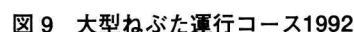
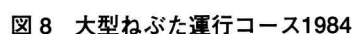


図7 大型ねぶた運行コース1975
(○が新町班、●が国道班の出発点)

関係である。すなわち、自動車交通量の増加に伴い、国道四号・七号の交通規制が次第に困難になり、車を閉め出してねぶたを運行する時間が限られてきたのである。国道は十分な幅があり、観客も多く、運行する側にとっては「見せ場」であるため、国道を運行コースからはずすことは考えにくい。主催者にとっても、有料観覧席を大量に設置できる場所は国道しかないため、国道を外すと収入減になる。しかし交通規制は周辺の道路に大渋滞を引き起こす。例えば一九七六年には「青森署によれば、三時間の国道閉鎖により、旧線路通り、浜町通りの迂回路が渋滞し、これが解消するには五時間かかるという。」（『東奥日報』一九七六・四・六）。このため警察や運輸業者などの反発は強く、「国道運行中止の話は一九六八年頃からあった」（『東奥日報』一九七六・四・六）という。このため、国道をどれくらいどの時間閉鎖できるかが、ねぶた運行の総時間を規定しているのである。

国道の使用制限がコース変更に最初に影響を与えたのは一九七二年である。この年は一三台の大型ねぶたが出たが、国道を一時間半で通過せねばならなかったため、ねぶたを「新町班」と「国道班」に分け、新町班はコース途中の新町から出発し、国道から出発してきた国道班がその後についた（一九七二年のコースが一部不明のため、一九七五年のコースを図7に示す）。運行団体はすべて国道からの出発を希望したにもかかわらず、国道の使用制限から、国道出発は一〇台以内に限定という妥協を余儀なくされたのである（このように出発地点を二つに分ける運行は、一九八二年まで続いたと思われる）。

ねぶた運行コースの変遷で、一九六八年に続く大きな転換点是一九八三年である。この年のコース変更は、国道の規制と、後述するハネト問題への対応を考慮してのものであった。それ以前には、六日のねぶた運行は、諏訪神社前、税務署通り交差点、電話局前、市役所前などと場所を変えながらも、戦後は一貫してすべて国道上が出発点であり、国道上



289

幅員二四メートルを最大限に活用し、間隔をできるだけ詰め各運行団体間の連絡をより密にし、国道時間制限二時間を厳守し一日最大運行台数二四台の運行が可能となるものであります。しかしこの要望は受け入れられず、一日最大二台での運行が現在も続いている。

(4) ねぶた団地の移転

既に述べたように、ねぶたを作る用地を確保できない団体が空き地を共同利用し、そこに小屋を連ねたのが通称「ねぶた団地」である。ねぶた団地の誕生時期は確定できなかったが、一九七〇年に、商工会議所会頭と観光協会会長の連名で、市に「ねぶた団地の造成について請願」を出している。その中に「ねぶた団地の造成についてはかねてから製作出場者側よりつよい要請があり、今年テストケースとして、市内二ヶ所（浜町電話局付近と浦町駅跡地）に設定したところきわめて好評を博した」との記述がある。ここから判断すると、一九七〇年にねぶた団地を二カ所設定したことになる。次に『東奥日報』によれば、ねぶた団地の記事の初出は一九七五年で、「例年、柳町通りに設置されるねぶた団地は、製作場所を確保できない団体のために、県有地を市の要望で提供してもらい、昭和四〇年頃誕生した。もともと地元消防団が使っていたが、団地になってからは市役所ねぶたをはじめ、例年五、六台が、祭りの一ヶ月前くらいから『入居』した。ところが駐車場不足が深刻化したため、県はここを駐車場とし、八月一日の使用開始を予定しているという。このため団地の移転が決まった。」（『東奥日報』一九七五・五・一六）となっている。こうしてみると、遅くとも一九七〇年にねぶた団地が出来上がったようだ。

その後、一九七五年から八〇年までは野脇中学校跡地（現、青森文化会館）を市から借用した。八一年から九一年までは青森中央高校跡地（現、中央西公園）を使った。中央西公園は、運行コースから南に離れ

ていることもあり、一九八四年には運行コースを南に延長し、平和公園で解散にした。このため、運行終了後も平和公園に若者がたむろすることが問題になった。

さて、これらのねぶた団地では、全団体を収容するスペースがないため、いくつかの団体は、他の場所を使用せざるを得なかった。例えば中央西公園の場合、ピーク時の一九九一年には二四団体中二〇台を収容し、他の四団体はNTT中央町敷地と、本町・港町海手に小屋を建てた。³⁹⁾こうした分散を避け、中心街に近い場所に観光客の誘致を考慮して一九九二年に作られたのが、現在のねぶた団地「ラッセランド」である。

さて、ねぶた団地が作られた一九七〇年以降、ねぶた期間中は団地からねぶたが発売し、運行を終えたとまた団地に帰るため、ねぶた団地の移転がコース設定に影響を与えることがあった。一九八一年に中央西公園に移転した際も、三年後の一九八四年から解散場所を平和公園に変えたが、一九九二年の移転もコースを大きく変えることになった。

この時には、青森観光協会が「新ねぶた団地検討特別委員会」を設置して移転後のコースを検討した。コース設定上の留意事項として、一・運行コースの障害物、二・大人ねぶた待機場所、三・子供ねぶた待機場所、四・運行コースの照明、五・観覧席の設置場所、六・道路の幅員及び路面状況、七・運行距離、この七点を挙げて検討した結果、委員会では四つの試案が提起された。結果的に、「新町・国道コース」と呼ばれる、それまでのコースを踏まえながら出発・解散地点だけを変えた案に落ち着く。なお、この時に検討された他の案には、「新町・浜町コース」という国道を通らない案もあった。この案ならば、国道使用制限二時間の枠にとらわれることなく、ゆとりをもったねぶた運行ができるというメリットがあったのだが、幅の広い国道を使わないと運行の「見せ場」がない、観客席が減少するため予算に影響が出るという問題があったため、従来のコースとさほど変わらないコースになったのである。⁴⁰⁾結局、一九

九二年の運行コースは、新町・柳町交差点を出発し新町通りを東に進み、平和公園通りを南下、国道を西に進み、八甲通りを北上し新町通りに戻り、出発点で解散という周回コースになった。この周回コースが、一九九二年以降の運行コースの基本形になっていく。

(5) ハネトの変化

コース変更の要因としてもう一つ指摘できるのは、「ハネト」の変化の影響である。

青森ねぶた祭の特徴の一つに、自由に参加できるハネトの存在がある。例えば一九六八年の『広報あおもり』には、「青年会議所で運行する観光ねぶたには、観光客をはじめ一般市民のみなさんが、自由にハネトとして出ることができます」「観光客をはじめ、一般市民だれでも出ることができます。出たいかたはあらかじめ申し込みしてくださいさばさいわいです。ハネトはゆかた(どんなゆかたでも結構です)と、ぞうりのお支度はお忘れなく」(『広報あおもり』一九六八年八月一日号)と記されている。

ハネトの踊り方には特に決まりはなく、単に跳ねるだけである。ただし、戦後は振り付けを決めて踊る団体もあった。荒川青年団が始めたといわれ、「郡部のねぶた」^④が盛んに採用し、婦人会の女性を中心に、統一のとれた踊りを見せた。しかし地域を母体とした大型ねぶたはほぼ姿を消し、このような踊りをするのは現在では自衛隊だけである。

現在のハネトは、ただ跳ねるだけであるため、誰でも参加できる反面、長い運行コースを跳ね続けることは困難になる。このため、少し跳ねてはドラドラ歩くという繰り返しのようになってしまっている。これが見苦しいと問題化し始めるのが、一九七〇年代前半のことである。「今年は主催者の呼びかけでハネトのドラドラ歩きは例年より少な目だが、市役所県庁などの大所帯組は人数が多く三百メートル以上も続く。しかも相変

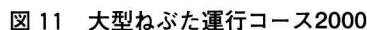
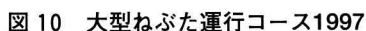
わらずの泥酔ハネトにはゲンナリ。見慣れている市民も眉をひそめていた。」(『東奥日報』一九七二・八・六)。「広報あおもり」にも「ねぶたのだいご味は、笛・太鼓にあわせハネルことにあります。だから歩きはやめ、かけ声などをかけましょう。」(『広報あおもり』一九七三年八月一日号)という注意の呼びかけが一九八〇年まで毎年掲載されていく。こうした傾向に対し、主催者の運行委員会に所属する委員の声として「来年からは酔っぱらいハネトを閉め出したい。商店会では昨年から沿道に酒を出さないようにしている。ねぶたの正調踊りを忘れ、バカ踊りをする。これでは十分も踊れば息が切れて結局ドラドラ歩くだけ。これはすべて酒が原因だ。各ねぶた運行責任者はハネトを掌握しなければ市民からそっぽを向かれるばかりだ」(『東奥日報』一九七三・八・八)という意見が紹介されている^⑤。

ハネトに関しては、ねぶたの運行と反対方向に歩く「逆流」もまた問題になった。『広報あおもり』には一九七三年から、「運行が始まったらハネトは逆戻りしないようにしましょう」(『広報あおもり』一九七三年八月一日号)という注意の呼びかけが一九八〇年まで毎年掲載されていく。「これまではハネトが八甲通りから柳町交差点にかけて後戻りしはじめ、他のねぶたに加わったりすることから運行そのものに支障を与えていた。これがドラドラ運行の原因になり、観覧者から不満の声が出されていた。」(『東奥日報』一九七七・八・一〇)というように、ねぶたの進行の妨げになり始めたのである。

一九八〇年代に入ると、こうした問題がより深刻化していく。一九八一年には主催者が「青森市、青森商工会議所、青森観光協会の主催三団体は、運行団体に対する注意事項をまとめた。一、集合時間(出発三〇分前)厳守、二、ハネトの逆行禁止、三、ハネトは花笠着用、四、ディスコ調踊りは運行団体等で排除する、五、ハネトにはカン、ピン類などを持ち込まないよう指導する。」(『東奥日報』一九八一・七・二三)。

策が検討されはしたものの、今日までその問題は続いている。⁽⁴³⁾

さて、ハネトの増加がとうとう運行コースを変えるほどの影響を持ち始めたのが一九八三年のことである。前年までのコースでは、「祭り気分が最高潮に達した時に広い国道から狭い新町通りに入っていかなければならないので、スムーズな運行が期待できない」(『東奥日報』一九八三・五・一一)ことから、コースを逆回りにし、国道をコースの前半から後半に移した。これは既に述べたように、国道での出発前の待機が交通の妨げになるという理由もあったのだが、ハネトの人数が多すぎて、広い道から狭い道に入る際に時間がかかってしまうことが変更の最大の



理由であった。しかしコース変更にもかかわらず、「五日には一一台目の市役所ねぶたにハネトが集中、新町通り全体がハネトで埋まってしまい、身動きがとれずストップ」(『東奥日報』一九八三・八・八)というように、根本的な解決策にはならなかった。これ以降、ハネトがねぶた祭にとって重要な問題になっていくのである。

さて、一九九二年のねぶた団地移転に際して運行コースも変わり、新町と柳町の交差点が出発・解散地点になった。ところが、行列の先頭が運行コースを一周して解散地点にさしかかる頃、最後部のねぶたはまだ出発していない。このため多数人数のハネトでごった返し、混乱を招くとともに、最後部のねぶたに多くのハネトが集中する結果になった。このため一九九七年には、出発・解散地点を分離してハネトの分散をはかるためコースを短縮し、八甲通りと国道の交差点から出発した(図10)。

この結果、従来は運行が行われていた新町通りと八甲通りが待機場所となった。これに対し新町通り商店街では、「一、祭りはその都市のメインストリートを通るべき、二、新町通りが待機場所になったからといってカラスハネトの排除にはつながらない、三、新町通りという目立つ場所での祭りの裏舞台の醜態をさらすべきではない、などと見直しを求めた」(『東奥日報』一九九七・五・一一)と、このコースに反発した。そのため翌年からはほぼ前のコースに戻る。

しかし二〇〇〇年には、祭り終了後にカラスハネトが駅前にあたむろして困るという苦情などを考慮してコースを変更することになる。一〇ものコース原案を作成し検討した結果決まったコース(図11)は、まず出発・解散地点を東に移し、本町通り・税務署通り交差点とした。駅前や繁華街である新町から解散地点を遠ざけたのである。さらに、ねぶたのうち最後の四台は途中のホテル青森前でコースを外れ、海沿いをねぶた小屋に戻ることにした。これにより最後部につくことが多くなっていたカラスハネトを、運行終了後、繁華街ではなく海沿いに誘導し、解散さ

せようと試みた。この年は、花火を打ち上げて露天商に怪我をさせたとして一名が逮捕されたほかは目立ったトラブルはなかったものの、のべ一万人のカラスハネトが集結してしまい、翌年度以降に根本的な対策を必要とすることが明らかになった。

このように、運行コースを設定する際、ハネトのふるまいを考慮に入れることが欠かせない条件になってしまったのである。

④ 時期別の特徴

青森ねぶたは変化し続ける祭礼である。ここでは、これまで分野別に述べてきた様々な変化を通観し、青森ねぶたの戦後史を時期別に区分してみたい。

まず、一九四七年の本格復活から一九六一年までを第一期としてみたい。この時期には、戦争で中断したねぶたが「港まつり」の一部として復活し、一九五八年に至ってようやく名称も「青森ねぶた祭」に定まる。ねぶたの形態も、国道使用を前提に横幅が広がったものの、その一方で新町ネオンによる高さ制限で、現在のような横長の形が定まる。作品としては、北川金三郎「勸進帳」(一九五七、東北電力)や、北川啓三「村上義光吉野の関所」(一九六二、日本通運、第一回田村磨賞受賞作)などが代表作であり、北川親子がねぶたの作風を確立する。この時期は、他都市とは異なる青森ねぶたがひとまず定型化したのが特徴である。

次に、一九六二年から一九六七年までを第二期とする。この時期には、観光化へ向けた様々な施策が動き出す。まず一九六二年、青森観光協会がねぶた祭を観光の最重点として打ち出す方針を決め、観光キャラバンを開始する。映画ロケやテレビ放送にねぶたが登場する機会も増える。「東北三大祭」ツアーが始まり、観光客が徐々に増え始める時期である。一方、ねぶたを出す団体から見ると、地域を母体とする大型ねぶたが激

減し、行政や公共団体、企業が一九六四年からは過半数になる。その原因は経費が増加し、もはや地域ではねぶたを支えきれなくなったことにある。しかし、高額な経費を出し得る団体が参入してきたからこそ、ねぶたは大きく発展したと見ることもできる。そして、一九六二年には最優秀賞として一団体のみに贈られる「田村磨賞」が制定され、以降、団体間の競争がねぶた師のレベルアップを促していく。この時期は、観光化、大規模化が始まった時期と見るができるだろう。

第三期は一九六八年から始まる。この年から有料観覧席が設けられ、ねぶた祭期間中の五日間、毎日大型ねぶたが運行されることになった。この結果、運行コースが観覧席にあわせて固定化され、毎日同じコースをねぶたが運行するようになる。国道、新町通りを中心とする、現行とほぼ同じコースがここに始まり、堤橋や青森駅はコースから外れていく。ねぶた本体でも、一九六七年の川村勝四郎作「国引」（国鉄）の登場で始まった、裸の男を題材にした迫力のある作風が、一九七二年の佐藤伝蔵作「国引」（日立連合）で頂点に達する。この作品がその後のねぶたの様式を決め、以後のねぶたはこの作品の影響下で試行錯誤を続けることになる。さらには一九七〇年には日本万国博覧会に遠征し、それを契機に、翌年から東京で開催された「日本の祭り」に一四年連続出場することになる。このことが関東からの観光客を集め、一九八〇年には人出が三〇〇万人を突破する。そして、ねぶたのPRに全国を回った観光宣伝キャラバンも一九八一年をもって終了する。ことさらに青森観光協会がPRしなくても観光客が集まるようになったのである。この間の一九七七年には、ねぶたの常設展示施設である「ねぶたの里」が民間企業により開園した。これはねぶたが観光資源として定着したことの現れであろう。一九八〇年には、国の重要無形民俗文化財の指定を受け、また運行団体協議会も発足して、組織面でも現在の体制が固まっていく。一九八三年にコースが変更される前年の一九八二年までを第三期とするが、この時

期こそ、青森ねぶたの完成期と呼んで差し支えないと考える。

次に、一九八三年から一九九六年を第四期とする。一九八三年に二〇台に達した大型ねぶたの台数はほぼピークに達し、二五台が上限になる。一九九二年には、既存団体の既得権を認め、新規参入を制限する覚書が作成される。またこの年は、現ねぶた団地「ラッセランド」への移転、コース変更などの大きな変化があった年でもあった。しかしこの一九九二年ではなく一九九六年を転換点とする理由は、増え続けるハネトへの対応がこの時期の大問題であり、その観点からすると一九九六年の事件が大きな転換点と考えられるからである。ハネトへの対応という観点からすると、一九八三年のコース変更は、増加したハネト対策を目的としたものであった。そして一九八八年頃から、ハネトの中に黒装束の「カラスハネト」が現れ、徐々に人数を増やしていく。やがてカラスハネトが暴徒化し、一九九六年には、カラスハネト同士の喧嘩の巻き添えで観光客が重傷を負う。この事件が大問題になり、「青森ねぶた祭諸問題検討協議会」を急遽組織して対応を協議することになる。つまりこの時期は、ねぶたの新規参入制限、ハネトの逸脱など青森ねぶたの問題点が噴出した時期である。この年を境に、青森ねぶたは次の時期に入っていく。一九九七年以降が第五期である。ここでは暴れるカラスハネトにどう対応するかが関係者の最大の関心になる。正装を呼びかけるキャンペーンでカラスハネトを押さえ込もうとするがうまくいかず、運行の工夫でかろうじて乗り切っていく。県や市の条例で対策に当たるべきであるという声が強まり、実際に条例設定の動きが具体化していく。そしておそらく、条例の成立・施行が、祭りに大きな影響を与えることになると思われる。いかなれば青森ねぶたの転換期がまさに始まったと考えられる。条例の方向性やその影響などについては、推移を見定めた上で、別の機会にまとめてみたいと考えている。

おわりに

以上、本稿ではねぶた本体、祭りの組織、運行形態、主としてこの三点に注目し、戦後の青森ねぶたの変化を跡付けてみた。

今回の作業では、祭り自体の変化をたどることに重点を置いたが、規模の大きな祭礼であるため、ねぶた起源伝承の成立過程、ねぶたの題材の変化、「東北三大祭」とその後の展開など、別稿に委ねた部分も多い。また、社会変化が祭りに与えた影響についても今回は極力触れずにおいたが、次の段階ではこの観点からの考察も試みてみたいと考えている。そして、こういった点の分析をふまえて、都市祭礼論に新たな知見を付け加えることを目指していきたい。

註

- (1) 坂上田村麿起源説とは、田村麿の蝦夷征伐の際に大型燈籠を使って敵をおびき寄せて退治したというもの。津軽為信起源説とは、文禄二(一五九三)年に藩主・津軽為信が盆に京都で大燈籠を作ったことに由来するというもの。ねぶた起源諸説の成立過程については本稿では触れず、別項を予定している。また、「藤田 一九七六」による研究がある。
- (2) 実際には農村のねぶたが都市のねぶたの影響下にあることについて、青森県・秋田県のねぶたを調査した大湯卓二は「農村、漁村などの集落では、本来の眠り流しの儀礼が素朴な形で継承されているように思えるが、実際には青森、弘前、黒石などの影響を受け、画一化した祭りを行う傾向にある」(大湯 二〇〇〇、二六)と述べている。
- (3) 同書には私も執筆者の一人として参加し、戦後のねぶたの変化について記述した。
- (4) 子供ねぶたや地域ねぶたが合同運行に登場するのは二日と三日だけで、台数も年により異なる。しかしこれらのねぶたは、他の場所では他の日時に独自の運行を行うことも多い。
- (5) 名称はねぶた、ねぶた、ねぶながし等さまざまである。なお、名称の違いについては本稿では触れない。
- (6) 運行団体の名称について、長い正式名称をいちいち記すと煩雑になるので、本稿では表1を除き、青森市で通用している略称をもって示す。
- (7) 青森市の主なねぶた師については、「澤田 一九八三」「澤田 一九八四」「澤田 一九八五」「成田 二〇〇〇」などに紹介がある。
- (8) 一九五九年に北川金三郎、一九八六年に北川啓三、一九八六年に佐藤伝蔵と鹿内一生、以上四人に贈られている。
- (9) 審査と表彰制度については「阿南 二〇〇〇a」を参照。
- (10) 夜はネオンサインが点灯したため「ネオン」と通称された。この設置時期については未確認だが、一九五四〜五五年頃と思われる。一九五五年のねぶたがその下を通過している写真があるため、一九五五年八月に設置されていたことは確かである。一九九二年に撤去された。
- (11) ねぶたの骨組みに竹を使わず、針金だけで組んだのは、一九五六年に織田智一が制作した「戦国武士の華」(青森駅前海産物商業協同組合)が最初とする説「成田 二〇〇〇、一七六」、佐藤伝蔵の考案とする説「澤田 一九八五」などがある。
- (12) 優美なねぶたの試みの極端な形が、女性(女神)の裸体をねぶたにすることである。これは山内岩蔵「玉取姫と大蛇の格闘」(消防第二分団、一九七四年)、鹿内一生「天女祝舞」(東北電力、一九八四年)、鹿内一生「水滸伝」(東北電力、一九八五年)、福地誠郎「素戔鳴尊と櫛稲田姫」(私たちのねぶた、一九九三年)、北村隆「天孫降臨」(ビブレ、一九九九年)などがあるが、ねぶたの一つの様式として確立するには至っていない。
- (13) 田村麿賞はねぶた本体、囃子、ハネト、運行など全体の出来映えを総合評価し、団体に対して与えられる賞であり、決してねぶた本体だけを審査した賞ではない。しかし本体が評価の中心となることは確かであり、世間的にはそのように解釈されることが多く、受賞はねぶた師の評価にそのままつながっている。実際に表彰式では、団体の代表とねぶた師の双方に賞状などが授与されている。本節と次節については、竹浪魁龍氏から多大なご教示をいただいた。なお、本稿ではねぶたの形態の変化に重点を置き、題材の変化については別稿を予定している。
- (14) 川村勝四郎の「国引」がねぶたの傾向を変えたことは、「澤田 一九八四」も指摘している。
- (15) ちなみに青森市内の国道四号のガードレールには、このねぶたを描いたらしくスケッチが、三内丸山遺跡の六本柱の建造物とともに、いわば青森を象徴する図柄としてあちこちに掲げられている。
- (16) 千葉伸二(一九四七〜)は一九七七年から千葉作龍を名のっている。
- (17) 一九六九年に主催者が頒布したパンフレット『東北三大祭 青森ねぶた祭』(東京アート青森スタジオカーニバル出版部発行)による。

- (19) その後の新機軸として特筆すべき動きは、まずは千葉作龍が一九九五年に「三内丸山・縄文鼓動」(コマツ)を制作したのを皮切りに、縄文時代をテーマとしたねぶたが流行したことがあげられる。また、竹浪魁龍が一九九五年に制作した「漢楚春秋 剛勇樊噲」(マルハ)は、人物のほかに人面を描いた巨大な桶が登場し、一人ねぶたであるが二人ねぶたとも見ることができるといふ構成であった。こうした試みが青森ねぶたの様式をどう変えていくかは、今後の推移を見守りたい。
- (20) 台車の構造については「昆二〇〇〇」に詳しい。
- (21) 扇子持ちはホイッスルを吹くことから「ピッピ吹き」とも呼ばれる。過去には優秀な扇子持ちとして広く名を知られた者がいた。例えば『東奥日報』一九五四・一・一五では、魚河岸の吉崎清蔵、日本通運の石塚柱太郎、それに五日市直一、中村半銭の名が上がっている。
- (22) 一段になった時期については確証を得られなかったが、ねぶた師の竹浪魁龍によれば「日本通運だけは昭和四六年まで二段高欄を残した」が、他の団体はもっと早くから一段にしていたという。そうすると一九七二年から全団体が一段高欄になったことになる。
- (23) 一九九八年に竹浪魁龍が制作した「森山弥七郎信真 青森開港」(青森愛友会)である。
- (24) 判明した一〇三六台を年度別に並べた一覧表を「宮田・小松二〇〇〇」に収録した。
- (25) この年の主催者の採点用資料には二八団体しか記されていないため、実際に三二団体すべてが出陣したのではないと思われる。
- (26) 一時的にはあるが、三団体に加えて青森青年会議所が主催者に名を連ねることがある。
- (27) 「第一二回『青森ねぶた祭』役員名簿」による。「青森ねぶた祭」としては初開催であるにもかかわらず、「第一二回」と、港まつりからの通算回数を冠していることが注目される。
- (28) 「昭和四五年『青森ねぶた祭』役員名簿」による。
- (29) 「青森ねぶた祭実行委員会則」による。
- (30) 青森観光キャラバンは、当初は青森観光協会、青森商工会議所、青森市役所の三者共催であったが、毎年の恒例行事として続けられ、一九七一年からは青森県が主催に加わった。そして一九八一年に終了した。
- (31) 東北三大祭の成立とその後の展開については別稿を予定している。
- (32) ねぶたの遠征については「阿南二〇〇〇a」「阿南・内田・才津・矢島二〇〇〇」で詳しく述べている。
- (33) 例えば一九九九年の本部予算について「平成一一年度青森ねぶた祭実行委員

- 会収支予算」を見ると、総予算二億一一九〇万円のうち、観覧席収入は一億二三〇〇万円を占める。これは総予算の五八%にも及び、最大の収入源である。
- (34) ただし主催三団体のうち、青森観光協会は一九五三年から五五年までねぶたを出した。青森市役所はねぶたを出しているが、一九八八年までは青森市職員互助会の名で出していたことからわかるように、職員の福利厚生を目的に始まったねぶたである。現在でも担当は総務部人事課福利厚生係であり、実行委員会に關係する観光課とは別の部署である。
- (35) これについては、企業間の競争という観点からの「飯田一九九二」によるルポルタージュがある。
- (36) 本節の内容は「阿南二〇〇〇a」で詳しく触れているので、ここでは概略にとどめる。
- (37) 本節で示す各年の合同運行のコースについては、主催者資料および『東奥日報』紙上の記事から推定したものである。
- (38) 私が見ることができたのは下書きで、提出月日は不明である。
- (39) 青森観光協会・新ねぶた団地検討特別委員会「新ねぶた団地並びにそれに付帯する事項の望ましい在り方について」一九九一年十二月。
- (40) 青森観光協会・新ねぶた団地検討特別委員会「新ねぶた団地並びにそれに付帯する事項の望ましい在り方について」一九九一年十二月。
- (41) 一九五四年に青森市と合併した大野村、一九五五年に合併した筒井町、高田村、荒川村などからのねぶたは、合併前にはこのように呼ばれていた。
- (42) ここで言われている「ねぶたの正調踊り」なるものが何かは不明である。
- (43) これについては「阿南二〇〇〇b」を参照されたい。

引用文献

- 青森観光協会 一九七七『青森観光協会二十五周年史』青森観光協会
- あおもり草子編集部 二〇〇〇『黒石ねぶたメモ』『あおもり草子』一二六
- 阿南 透 二〇〇〇a「青森ねぶたの現代」宮田登・小松和彦監修『青森ねぶた誌』青森市
- 阿南 透 二〇〇〇b「青森ねぶたとカラスハネト」日本生活学会編『祝祭の一〇〇〇年』ドメス出版
- 阿南透・内田忠賢・才津祐美子・矢島妙子 二〇〇〇『祭りの「旅」―「ねぶた」と「よさこい」の遠征・模倣・移植』『旅の文化研究所研究報告』九
- 飯田 守 一九九二『ねぶた祭り』汗と涙の企業ウォーズ』『現代』一九九二年九月号
- 池上良正 一九八六『ネブタの文化』弘前大学人文学部人間行動コース『ネブタ祭り調査報告書―文化・社会・行動』

大湊ネブタ百周年記念事業実行委員会 一九八五『大湊倭武多百年』
大湯卓二 二〇〇〇『青森周辺のねぶた』宮田登・小松和彦監修『青森ねぶた誌』青森市

小松和彦 二〇〇〇a『都市祭りとしての青森ねぶた』宮田登・小松和彦監修『青森ねぶた誌』青森市

小松和彦 二〇〇〇b『列島の中の青森ねぶた―ねぶたの仲間たちを訪ねて』宮田登・小松和彦監修『青森ねぶた誌』青森市

今 純三 一九二八『ネブタ』から『オサンケ』まで『民俗芸術』一一―一
昆 政明 二〇〇〇『青森ねぶたの制作』宮田登・小松和彦監修『青森ねぶた誌』青森市

笹森建英編 一九九五『津軽ねぶた論攷―黒石〈分銅組若者日記〉解』黒石青年会議所

澤田繁親 一九八三『青森ねぶた師の系譜(上)』『月刊キャロット』ねぶた特集一〇

澤田繁親 一九八四『青森ねぶた師の系譜(中)』『月刊キャロット』ねぶた特集一一

澤田繁親 一九八五『青森ねぶた師の系譜(完結編)』『月刊キャロット』ねぶた特集一二

清野耕司 二〇〇〇『青森ねぶたの歩み』宮田登・小松和彦監修『青森ねぶた誌』青森市

対馬千代一編 一九五二『青森市戦災復興史』青森市政調査会

長沢義男 一九七三『名人北川啓三氏に聞く』『東北三大まつり 青森ねぶた祭り』第六号

中牧弘允 一九七九『ねぶたとねぶた―風流の眠流し』『季刊民族学』九

成田 敏 二〇〇〇『青森ねぶたの形態とそれを支えた人々』宮田登・小松和彦監修『青森ねぶた誌』青森市

能代のねぶながし行事記録作成委員会 一九九八『眠流し行事 能代役七夕』能代市教育委員会

弘前大学人文学部人間行動コース 一九八六『ネブタ祭り調査報告書―文化・社会・行動』

藤田本太郎 一九七六『ねぶたの歴史』弘前図書館後援会

宮田登・小松和彦監修 二〇〇〇『青森ねぶた誌』青森市

八代茂樹 一九七七『ねぶたと日本通運』『青森ねぶたと共に』日本通運青森支店

柳田国男 一九九〇a(一九九四)『ネブタ流し』『柳田国男全集』一一、ちくま文庫

(初出は『郷土研究』二巻五号)

柳田国男 一九九〇b(一九二六)『眠流し考』『柳田国男全集』一六、ちくま文庫

私たちのねぶた 一九九三『私たちのねぶた二十周年記念誌』

(江戸川大学社会学部、国立歴史民俗博物館共同研究員)
(二〇〇一年二月二十二日受理、二〇〇二年十月十一日審査終了)

Modern Changes in Aomori Nebuta Festival

ANAMI Toru

This paper addresses the “*Aomori Nebuta Matsuri* (Aomori Nebuta Festival)”, held in Aomori every year from the 2nd through the 7th of August, and considers the process by which it developed into the large-scale urban festival it is today.

Currently, the Aomori Nebuta Festival is an event consisting of the collective effort of a group of people that consists of the following set of three elements: huge doll-shaped lanterns, musical accompaniment, and dancers called “*haneto*”. Although the festival is designated as an important intangible folk cultural property, it is not a religious event connected to any particular temple or shrine and the origins and history of the festival remain uncertain. Similar events are found in Aomori prefecture as well as throughout eastern Japan, and before WWII the Nebuta Festival of Aomori City was not much different from such festivals of other regions. The present style of the Aomori City Nebuta Festival was most likely established after the war. This paper examines the process through which the festival was established and the transformations later undergone by the festival from the following three points: the nebuta itself (lanterns), the organization running the festival, and management conditions.

First of all, with regard to the nebuta itself, the upper limits as to size were determined based on the form of the urban districts of Aomori, with such factors as the width of the streets and the height of the pedestrian overpass being a consideration. The present style of the nebuta was established between 1967 and 1972 through the ingenuity of the creators, called “*nebuta-shi*”. Next, with regard to running the festival, rising expenses brought about a shift from the local organizations to administrative bodies and corporations, giving the organization an equal voice as the sponsors. Lastly, regarding management conditions, provisions for tourists such as setting up seats for viewing the festival to rent, and time restrictions on the use of national roads, as well as increasing incidences of inappropriate behavior by the “*haneto*” all were taken into account in determining the route of the festival and the number of nebuta.

If we take an overall look at the developments from after WWII, the history of the festival can be divided into five periods. The first period from 1947 when the festival was first truly revived to 1961 was the period of reestablishing the festival after a ten-year gap due to the war. The second period from 1962 to 1967, was the period for the beginning of the making of the festival as a tourist attraction and enlarging the scale of the festival. The third period between 1968 and 1979 was the period in which the “*Aomori Nebuta Matsuri*” was fully

established and was at its peak. The fourth period from 1980 to 1996, was a transition period, with a rapid rise in the number of “*haneto*” and an increase in inappropriate behavior by the young people participating in the festival. Finally, the fifth period, which began in 1997 in response to the outbreak of violence in 1996, is a period of transformation where people are busy looking for countermeasures for inappropriate behavior and this state of trial-and-error still continues today.